特別
へ4
8051

ヘ4
8051
40-6782

やまとうたはひとのこゝろをたねとしてよろ
づのことのはとぞなれりける世中にある人
ことわざしげきものなれば心におもふことを見る
ものきくものにつけていひいだせるなり花に
なくうぐひすみづにすむかはづのこゑをきけ
ばいきとしいけるものいづれかうたをよまざりける
ちからをもいれずしてあめつちをうごかし見えぬ
おにかみをもあはれとおもはせをとこをむ
なのなかをもやはらげたけきものゝふのこゝろ

をもなぐさむるはうたなりこのうたあめつちの
ひらけはじまりける時よりいできにけり あまのうき
はしのしたにて女神男神となりたまへる
ことをいへるうたなり
しかあれども世につたはることは
ひさかたのあめにしてはしたてるひめに
はじまり したてるひめとはあめわかみこのめなりせうとの神のかた
ちをかやたにうつりてかゞやくをよめるえびすうたなるべ
しこれらはもじのかずもさだまらず
うたのやうにもあらぬことゞも也
あらかねの地にしては
すさのをのみことよりぞおこりけるちはやぶる
神世にはうたのもじもさだまらずすなほにして
事の心わきがたかりけらしひとの世となりて

てすさのをのみことよりそみそもしあまり
ひともしはよみける すさのをのみことはあまてるおほむ
神のこのかみ也女とすみたまはむとて
いつものくにに宮はしらしたまふ時にそのところにやいろのくものたつをみて
よみたまへるなりやくもたついつもやへかきつまこめにやへかきつくる
そのやへ
かきを
かくてそ花をめてとりをうらやみかすみを
あはれひつゆをかなしふ心ことはおほくさま
さまになりにけるとをき所もいてたつあし
もとよりはしまりて年月をわたりたかき山もふもと
のちりひちよりなりてあまくもたなひくまて
おひのほれることくこのうたもかくのことくなる
へしなにはつのうたはみかとのおほむはしめ也
おほさゝきのみかとのなにはつにてみこときこえける時東宮をたかひにゆつ
りてくらゐにつきたまはてみとせになりにけれは王仁といふ人の
いふかり思てよみてたてまつりける歌なり
この花はむめの花をいふなるへし あさかの山のことはゝ
うねめのたはふれよりよみて かつらきのおほきみをみ
ちのおくへつかはしたりけるにくにのつかさことおろそかなりとてまうけなとしたりけれとすさま
しかりけれはうねめなりける女のかはらけとりてよめる也これ
にそおほきみの
心とけにける このふたうたは
うたのちゝはゝのやうにて
そてならふ人のはしめにもしけるそもそも
うたのさまむつなりからのうたにもかくそある
へきそのむくさのひとつにはそへうたおほさゝ

きみのことをそへてまつれるうた
なにはつにさくやこの花ふゆこもり
いまははるへとさくやこの花といへるなるへし
ふたつにはかそへうた
さく花におもひつくみのあちきなさ
みにいたつきのいるもしらすてといへるなる
へし　これはたゝことにいひてものにたとへなともせぬ物也このうたいかにいへるにかあらむその心えかたしいつゝにたゝことうたといへるなむこれにはかなふへき
みつにはなすらへうた
きみにけさあしたの霜のおきていなは
こひしきことにきえやわたらむといへるなる
へし　これはものにもなすらへてそれかやうになむあるとやうにいふなりこのうたよくかなへりともみえすたらちめのおやのかふこのまゆこもりいふせくもあるかいもにあはすて かやうなるやこれにはかなふへからむ
よつにはたとへうた
わかこひはよむともつきしありそうみの
はまのまさこはよみつくすともといへるな
るへし　これはよろつの草木鳥けたものにつけて心をみするなりこのうたはかくれたる所なむなきされとはしめのそへうたとおなしやうなれはすこしさまをかへたるなるへしすまのあまのしほやく煙風をいたみおもはぬ方にたなひきにけりこのうたなとやかなふへからむ
いつゝにはたゝことうた
いつはりのなき世なりせはいかはかり

人乃ことのはうれしからましといへるなる

へし　これは事のとゝのほりたゝしきをいふ也この歌の心さらにかなはす
とめうたとやいふへからむ山さくらあくまていろを
みつるかな花ちるへくも風ふかぬよに　むつにはいはひうた

この殿はむへもとみけりさきくさ乃

みつはよつはにとのつくりせりといへるな

るへし　これは世をほめて神につくるなりこの歌いはひうたと
はみえすなむあるかすかのにわかなつみつゝよろつ世を
いはふ心は神そしるらむこれらやすこしかなふへからむ
おほよそむくさにわかれむことはえあるましきことになむ

いまの世中いろにつきひとのこゝろ花になりにける

よりあたなるうたはかなきことのみいてく

れはいろこのみのいへにむもれ木の人しれぬこ

とゝなりてまめなるところには花すゝきほにいたす

へきことにもあらすなりにたりそのはしめを

おもへはかゝるへくなむあらぬいにしへの世々の

みかと春の花のあした秋乃月の夜ことにさふら

ふひと〳〵をめしてことにつけつゝうたをたてまつ

らしめたまふあるは花をそふとてたよりなき

ところにまとひあるは月をおもふとてしるへな

きやみにたとれるこゝろ〳〵をみたまひてさか

かほりとしろしめしけむしらなみのみはあら浪
はられいしまきこへはくも山はかけてきみを
ねのひよろこひ方にすきそ乃しひ心はあまね
あしのはふかはようへて人をこひ松虫のねは
こゑとしのひ年のはこすみんの江のはつもあひをり
乃やうはたほすたとこ山のむらしをたもかいて
をみなへしのひときをくねるにもうつろいて
うなくはゑひろまつ春のあしたは花のちるを
見秋の夕くれはこのもかなつるなきこゝろハ

らしとにかゝみのかけにはかんゆらゆきとなみとを
おなき草のはゆみはのあわを見てわかみをおと
ろきあくはきのふきさのえなころにて世をうるわ
世はわひ志てしかしもうとくすわあくハ松山
の浪をかけ野なかのみつをくみ秋えきのつき
もをなかめあかの月のえきのそねかきあとのそへ
あらそくれ竹のふきふしを人はいひよし野河
をひきて世中をうらんきはらは今えあし
の山も煙たゝすなからのはしもはくろ

ならときく人ゝ歌よのみち心をあつくはしめける
（文武天皇）いにしへよりかくつたはるうちにもならの御時
よりそひろまりにけるかの御世や歌の
心をしろしめしたりけむかの御時に
おほきみつのくらゐかきのもとの人まろなむ歌
のひしりなりけるこれはきみもひともみをあ
はせたりといふなるへし秋のゆふへたつた河
になかるゝもみちをはみかとのおほむめにはにしき
とみたまひ春のあしたよしのゝ山のさくらは

人まろの心には雲かとのみなむおほえける又
山のへのあか人といふ人ありけり歌にあやしく
たへなりけり人まろはあか人かかみにたゝむ事
かたくあかひとはひとまろかしもにたゝむことかたく
なむありける

ならのみかとの御うた　龍田河もみちみたれて
なかるめりわたらはにしきなかやたえなむ
人麿　むめの花それともみえすひさかたのあまきる雪のなへてふれゝは
ほのほのとあかしのうらのあさきりに嶋かくれゆく舟をしそおもふ
赤人　春の野にすみれつみにとこし我そ野をなつかしみひと夜ねにける
わかの浦にしほみちくれはかたをなみあしへをさしてたつなきわたる

この人々をおきて又すくれたる人もくれ竹の
世ゝにきこえかたいとのよりよりにたえすそありける

これはさきの事をあらためてすぢ一かうしかと（さきの事は前段未決）
るはきこえわれらこにいにしへのことをも哥
の心をもしれる人わづかにひとりふたりなりき
しかあれどこれかれえたるところえぬところたがひになむ
あるかの御時よりこの方年はもゝとせあまり世は
とつぎになむなりにけるいにしへのことをも
うたをもしれる人よむ人おほからずいまこの
ことをいふにつかさくらゐたかき人をばやすき
やうなればいれずそのほかにちかき世にその名

きこえたる人はすなはち僧正遍昭は哥のさまは
えたれどもまことすくなしたとへば絵にかける
をうなを見ていたづらに心をうごかすがごとし　あさみどりいとより
かけてしらつゆを玉にもぬける春の柳か　はちすば
のにごりにしまぬ心もてなにかはつゆを玉とあざむく　さが
のにてむまよりおちてよめる　名にめでておれるばかりぞをみなへし
我おちにきと人にかたるな
ありはらのなりひらは
その心あまりてことばたらずしぼめる花のいろ
なくてにほひのこれるがごとし　月やあらぬ春やむかしの
春ならぬわが身ひとつはもとの身にして
もとの身にして　おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の
おいとなるもの　ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな
すなはち
ふんやのやすひではことばはたくみにてそのさま身におはず

そのさま身におはす　いはゝあき人のよききぬ
きたらむかことし　吹からにのへの草木のしほるれはむへ山
かせをあらしといふらむ　深草のみかとの
の御國忌に　草ふかきかすみの谷にかけ
かくしてるひのくれしけふにやはあらぬ　宇治山の僧きせんは
ことはかすかにしてはしめをはりたしかならす
いはゝ秋の月をみるにあかつきの雲にあへるか
ことし　わかいほはみやこのたつみしかそすむ　よをうち山と人はいふなり　よめるうたおほ
くきこえねはかれこれをかよはしてよくし
らす　をのゝこまちはいにしへのそとほりひめの
流なりあはれなるやうにてつよからす　いはゝよ

きをうなのなやめるところあるにゝたりつよから
ぬはをうなのうたなれはなるへし　思ひつゝねれはや
人のみえつらむ　ゆめとしりせはさめさらましを　いろみえてうつろふものは世中の
人のこゝろの花にそありける　わひぬれは身をうき草の
ねをたえてさそふ水あらはいなむとそ思ふ　そとほりひめの哥
わかせこかくへきよひなりさゝかにのくものふるまひかねてしるしも
大伴のくろぬしはそのさまいやし　いはゝたきゝ
おへる山人の花のかけにやすめるかことし　思ひいてゝ　こひしき時は
はつかりのなきてわたると人はしらすや　かゝみ山いさたちよりて　この
みてゆかむとしへぬる身はおいやしぬると
ほかの人ゝその名きこゆる野邊におふるかつ
らのはひひろこりはやしにしけきこのはのことく

くにおほかれとうたとのみおもひてそのさまし
らぬなるへしかゝるにいますへらきのあめの
したしろしめすことよつのときこゝのかへりにな
むなりぬるあまねきおほむうつくしみのなみの
やしまのほかまてなかれひろきおほむめくみ
のかけつくはやまのふもとよりもしけくおはし
ましてよろつのまつりことをきこしめすいとま
もろもろのことをすてたまはぬあまりにいにし
へのことをもわすれしふりにしことをも
おこしたまふとていまもみそなはしのちの
よにもつたはれとて延喜五年四月十八日に
大内記きのとものり御書所のあつかり
きのつらゆきさきのかひのさう官おほしかうち
のみつね右衛門の府生みふのたゝみねらにお
ほせられて万えうしふにいらぬふるきうた
みつからのをもたてまつらしめたまひてなむ
それかなかにむめをかさすよりはしめてほとゝ
きすをきゝもみちををりゆきをみるに

いたるまて又つるかめにつけてきみをおもひ
人をもいはひ秋はきなつくさをみてつまをこひ
あふさか山にいたりてたむけをいのりあるは
春夏秋冬にもいらぬくさ/\のうたをなむ
えらはせたまひけるすへて千うた
はたまきなつけてこきむわかしふといふ
かくこのたひあつめえらはれて山したみつの
たえすはまのまさこのかすおほくつもり
ぬれはいまはあすかゝはのせになるうら

みもきこえすさゝれいしのいはほとなるよろ
こひのみそあるへきそれまくらことは春の
花にほひすくなくしてむなしき名のみ
秋の夜のなかきをかこてれはかつは人の
みゝにおそりかつはうたのこゝろにはちおも
へとたなひくくものたちゐなくしかのおき
ふしはつらゆきらかこの世におなしく
むまれてこの事の時にあへるをなむよろこひ
ぬる人まろなくなりにたれとうたのことゝ

まはらのかぜとひゞきつゝことはてしこの
ひかすゝひゆきのふとこのゝさのうしあら
まやあをやきのいとさえすまつのしのちわ
うせすゝしてまさきのつらかのくほそうり
とわのあとひさしくとしまわらはうこの
きゆをもわゝとの心をえらむ人もなは
ちらの月をみるのことくはいかへをあかさ
ていまをこひはらみんのも

古今和歌集巻第一

春歌上

ふるとしに春たちける日よめる

在原元方

年の内に春はきにけりひとゝせをこぞとやいはむことしとやいはむ

春たちける日よめる

紀貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立けふの風やとくらむ

題しらず

よみ人しらず

春霞たてるやいづこみよしのゝよしのゝ山に雪はふりつゝ

二条のきさきの春のはじめの御うた

雪の内に春はきにけり鶯のこほれる涙いまやとくらむ

題しらず

讀人しらず

梅かえにきゐる鶯春かけてなけどもいまだ雪はふりつゝ

雪の木にふりかゝれるをよめる

素性法師

春たてば花とや見らむ白雪のかゝれる枝に鶯のなく

題しらず

よみ人しらず

心ざしふかくそめてしおりければきえあへぬ雪の花と見ゆらん

ある人のいはく、さきのおほきおほいまうちぎみの歌也

二条のきさきのとう宮のみやすん所ときこえける時

正月三日おまへにめしておほせことあるあひ
たに日はてりなから雪のかしらにふりかゝ
りけるをよませ給ひける

文屋やすひて

春の日のひかりにあたる我なれとかしらの雪となるそわひしき

雪のふりけるをよめる

きのつらゆき

霞たちこのめも春の雪ふれは花なきさとも花そちりける

春のはしめによめる

ふちはらのことなほ　言直

春やとき花やおそきとききわかむ鶯たにもなかすもあるかな

春のはしめのうた　みふのたゝみね

春きぬと人はいへとも鶯のなかぬかきりはあらしとそ思

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

谷風にとくる氷のひまことに打いつる波や春のはつ花

源まさすみ　當純　右大臣男

花のかを風のたよりにたくへてそ鶯さそふしるへにはやる

紀とものり

うくひすの谷よりいつるこゑなくは春くることをたれかしらまし

大江千里

在原棟梁　業平朝臣男

春たてと花もにほはぬ山さとはものうかるねに鶯そなく

題しらす　　　読人しらに

野辺ちかくいへゐしせれは鶯のなくなるこゑはあさなあさなきく

かすかのはけふはなやきそわか草のつまもこもれりわれもこもれり

みやまには松の雪たにきえなくに宮こはのへのわかなつみけり

春日野のとふひのゝもりいてゝみよ今いくかありてわかなつみてむ

梓弓をして春雨けふふりぬあすさへふらは若菜つみてむ

仁和のみかとみこにおましましける時に人にわかなたまひける御うた

きみかため春ののにいてゝわかなつむわか衣てに雪はふりつゝ

哥たてまつれとおほせられし時よみてたてまつれる

つらゆき

かすかのゝわかなつみにやしろたへの袖ふりはへて人のゆくらむ

題しらに　　　在原行平朝臣

春のきる霞の衣ぬきをうすみ山かせにこそみたるへらなれ

寛平御時きさいの宮の哥合によめる　　　源むねゆきの朝臣

ときはなる松のみとりも春くれは今ひとしほの色まさりけり

哥たてまつれとおほせられし時よみてたてまつれる

つらゆき

わかせこか衣春雨ふることに野辺乃みとりそ色まさりける

あをやきの糸よりかくる春しもそみたれて花のほころひにける

西大寺のほとりの柳をよみ侍る
僧正遍昭

浅緑絲よりかけて白露を珠にもぬける春乃柳か

題しらす
読人しらす

もゝちとりさへつる春は物ことにあらたまれとも我そふりゆく

をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくも喚子鳥哉

かりのこゑをきゝてこしへまかりける人を思てよめる
凡河内躬恒

春くれはかりかへるなり白雲の道ゆきふりにことやつてまし

帰雁をよめる
伊勢

春かすみたつをみすてゝゆくかりは花なきさとにすみやならへる

題しらす
よみ人しらす

折つれは袖こそにほへ梅花ありとやこゝにうくひすのなく

色よりもかこそあはれとおもほゆれたか袖ふれしやとの梅そも

やとちかく梅の花うへしあちきなくまつ人のかにあやまたれけり

梅花立よるはかりありしより人のとかむるかにそしみぬる

むめの花をおりて東三条の左のおほいまうちきみ
源常 嵯峨源氏左大臣左大将
号御子

鶯乃笠にぬふてふ梅花折てかさゝむおいかくるやと
薨卅

題しらす　　素性法師

よそにのみあはれとそみし梅花あかぬいろかはおりてなりけり

きみならて誰にかみせむ梅花いろをもかをもしる人そしる

くらふ山にてよめる　　　　つらゆき

梅花にほふ春へはくらふ山やみにこゆれとしるくそありける

月夜に梅花をゝりてと人のいひけれはをるとてよめる

みつね

月夜にはそれとも見えす梅花かをたつねてそしるへかりける

春の夜梅の花をよめる

春の夜のやみはあやなし梅花いろこそ見えねかやはかくるゝ

はつせにまうつることにやとりける人の家にひさしくやとらてほとへてのちにいたれりけれはかの家のあるしかくさたかになむやとりはあるといひいたして侍けれはそこにたてりける梅の花をゝりてよめる

つらゆき

ひとはいさ心もしらすふるさとは花そむかしのかににほひける

水のほとりに梅花さけりけるをよめる

伊勢

春ことになかるゝ河を花とみておられぬ水に袖やぬれなむ

年をへて花のかゝみとなる水はちりかゝるをやくもるといふらむ

家にありける梅の花のちりけるをよめる

くるとあくとめかれぬ物を梅花いつの人まにうつろひぬらむ

つらゆき

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

よみ人しらす

むめかゝを袖にうつしてとゝめては春はすくともかたみならまし

素性法師

ちるとみてあるへき物を梅花うたてにほひの袖にとまれる

題しらす

よみ人しらす

ちりぬともかをたにのこせ梅の花こひしき時の思ひいてにせむ

人の家にうゑたりけるさくらの花さきはしめたりけるをみてよめる

つらゆき

ことしより春しりそむる桜花ちるといふことはならはさらなむ

題しらす

よみ人しらす

山たかみ人もすさめぬさくら花いたくなわひそわれみはやさむ

又は、さとゝをみ人もすさめぬ山さくら

山さくらわかみにくれは春かすみ峰にも尾にもたちかくしつゝ

そめとのゝきさきのおまへに花かめにさくらの花をさゝせ給へるをみてよめる

清和母后明子 昌泰三年五月廿三日崩 七十二 太皇太后宮

さきのおほきおほいまうちきみ

忠仁公 摂政太政大臣

年ふれはよはひはおいぬしかはあれと花をしみれは物思ひもなし

なきさの院にてさくらをみてよめる

在原業平朝臣

世中にたえてさくらのなかりせは春の心はのとけからまし

題しらす　　　読人しらす

いしはしるたきなくもかな桜花たおりてもこむみぬ人のため

山のさくらを見てよめる

素性法師

見てのみや人にかたらむさくら花手ことにおりていへつとにせむ

花さかりに京を見やりてよめる

見わたせは柳さくらをこきませて宮こそ春の錦なりける

さくらの花のもとにて年のおいぬることをなけきてよめる

きのとものり

色もかもおなし昔にさくらめと年ふる人そあらたまりける

おれるさくらをよめる

つらゆき

たれしかもとめておりつる春霞立かくすらん山のさくらを

哥たてまつれとおほせられし時によみてたてまつれる

桜花さきにけらしなあしひきの山のかひよりみゆる白雲

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

とものり

みよしのの山へにさけるさくら花雪かとのみそあやまたれける

やよひにうるふ月ありける年よみける

伊勢

さくら花春くははれる年たにも人の心にあかれやはせぬ

さくらの花のさかりにひさしくとはさりける人のきたりける時によみける

読人しらに

あたなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり

返し　　業平朝臣

けふこすはあすは雪とそふりなまし消すは有とも花と見ましや

題しらに　　よみ人しらに

ちりぬれはこふれとしるしなき物をけふこそ桜おらはおりてめ

折とらはをしけにもあるか桜花いさやとかりてちるまてはみむ

きのありとも

さくらいろに衣はふかくそめてきむ花のちりなむのちのかたみに

さくらの花のさけりけるを見にまうてきたりける人に
よみておくりける　　みつね

わかやとの花見かてらにくる人はちりなむのちそこひしかるへき

亭子院歌合の時よめる

伊勢

見る人もなき山さとのさくら花ほかのちりなむのちそさかまし

古今和歌集巻第二

春哥下

題しらす

よみ人しらす

春霞たなひく山乃桜花うつろはむとや色かはりゆく

まてといふにちらてしとまる物ならはなにを桜に思ひまさまし

のこりなくちるそめてたき桜花有て世中はてのうけれは

この里にたひねしぬへし桜花ちりのまかひにいへちわすれて

うつせみの世にもにたるか花さくらさくとみしまにかつちりにけり

僧正へんせうによみておくりける

これたかのみこ

惟高 文徳第一
母従五位上紀種子
名虎女

桜花ちらはちらなむちらすとてふるさと人のきても見なくに

雲林院にて桜の花のちりけるを見てよめる

桜ちる花の所は春なから雪そふりつゝきえかてにする

そうく法し

さくらの花のちり侍りけるをみてよみける

花ちらす風のやとりはたれかしる我にをしへよ行てうらみむ

そせい法し

うりむゐんにて桜の花をよめる

いさ桜我もちりなむひとさかり有なは人にうきめみえなむ

承均法し

あひしれりける人のまうてきてかへりにけるのちに
よみてはなにさしてつかはしける

つらゆき

ひと目見し君もやくるとさくら花けふはまちみてちらはちらなむ

山のさくらをみてよめる

春霞なにかくすらむさくら花ちるまをたにもみるへきものを

心地そこなひてわつらひける時に風にあたらしとて
おろしこめてのみ侍けるあひたにおれるさくらの
ちりかたになれりけるをみてよめる

藤原よるかの朝臣

たれこめて春のゆくへもしらぬまにまちしさくらもうつろひにけり

東宮雅院(待賢門内北 壬生東)にてさくらの花のみかは水にちりてなかれけるをみてよめる

すかのゝ高世

枝よりもあたにちりにし花なれはおちても水のあわとこそなれ

さくらの花のちりけるをよみける

つらゆき

ことならはさかすやはあらぬさくら花みる我さへにしつ心なし

さくらのことゝくちる物はなしと人のいひけれはよめる

さくら花とくちりぬともおもほえす人の心そ風もふきあへぬ

さくらの花のちるをよめる

きのとものり

久方のひかりのとけき春の日にしつ心なく花のちるらむ

春宮のたちはきのちんにてさくらの花のちるをよめる

藤原のよしかせ 好風

春風は花のあたりをよきてふけ心つからやうつろふとみむ

さくらのちるをよめる　凡河内みつね

雪とのみふるたにあるをさくら花いかにちれとか風のふくらむ

ひえにのほりてかへりまうてきてよめる

つらゆき

山たかみ見つゝわかこすさくら花風は心にまかすへらなり

題しらす　一本 大伴黒主

春さめのふるは涙かさくら花ちるをおしまぬ人しなけれは

亭子院哥合の哥　つらゆき

さくら花ちりぬる風のなこりには水なきそらに浪そたちける

ならのみかとの御うた　平城天皇　大同天子

故郷と成にしならの宮こにも色はかはらす花はさきけり

はるのうたとてよめる　よしみねのむねさた

花の色は霞にこめて見せすともかをたにぬすめ春の山かせ

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

そせい法し

花の木も今はほりうへし春たてはうつろふ色に人ならひけり

題しらす　よみ人しらす

春の色のいたりいたらぬ里はあらしさけるさかさる花の見ゆらむ

はるのうたとてよめる　つらゆき

三わ山をしかもかくすか春霞人にしられぬ花やさくらむ

うりむゐんのみこのもとに花見にきた山のほと
りにまかれりける時によめる

そせい

いさ今日は春の山辺にまじりなむくれなはなけの花のかけかは

はるのうたとてよめる

伊つまてか野辺に心のあくかれむ花しちらすは千世もへぬへし

題しらす　よみ人しらす

春ことに花のさかりはありなめとあひ見む事はいのちなりけり

花のことよのつねならはすくしてし昔は又もかへりきなまし

吹風にあつらへつくるものならはこの一もとはよきよといはまし

まつ人もこぬものゆへにうくひすのなきつる花を折てけるかな

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原おきかせ

さく花はちくさなからにあたなれと誰かは春を恨てたる

春霞色のちくさに見えつるはたなひく山の花のかけかも

ありはらのもとかた

霞たつ春の山辺はとをけれと吹くる風は花の香そする

うつろへる花を見てよめる

みつね

花見れは心さへにそうつりける色にはいてし人もこそしれ

題しらす　よみ人しらす

うくひすのなくのへことにきて見れはうつろふ花に風そ吹ける

吹風をなきてうらみよ鶯は我やは花に手たにふれたる

仁和の中将のみやすん所の家に哥合せむとて
しける時によめる

典侍洽子朝臣 寛平延長 掌侍典侍 朱雀 別当

ちる花のなくにしとまる物ならは我鶯におとらましやは

藤原後蔭 蔵人右少将 中納言有穂男

花のちることやわひしき春霞たつたの山のうくひすのこゑ

うくひすのなくをよめる　そせい

こつたへはおのかはかせにちる花をたれにおほせてこゝらなくらむ

うくひすの花の木にてなくをよめる

みつね

しるしなきねをもなくかなうくひすのことしのみちる花ならなくに

題しらす

よみ人しらす

こまなめていさみにゆかむふるさとは雪とのみこそ花はちるらめ

ちる花をなにかうらみむ世中にわか身もともにあらむものかは

小野小町

花の色はうつりにけりないたつらにわか身よにふるなかめせしまに

仁和の中将のみやすん所の家に哥合せむとしける時によめる

そせい

おしと思ふ心はいとによられなむちる花ことにぬきてとゝめむ

志かの山こえに女のおほくあへりけるによみてつかはしける

つらゆき

つらゆき
梓弓春の山辺をこえくれは道もさりあへす花そちりける
寛平御時きさいの宮の哥合のうた
春の野にわかなつまむとこしものをちりかふ花に道はまとひぬ
山てらにまうてたりけるによめる
やとりして春の山辺にねたる夜は夢の内にも花そちりける
寛平御時きさいの宮の哥合のうた
吹風と谷の水としなかりせはみ山かくれの花をみましや
志賀よりかへりけるをうなともの花山にいりてふちの花のもとにたちよりてかへりけるによみておくりける

僧正遍昭
よそにみてかへらむ人にふちの花はひまつはれよ枝はをるとも
家にふちの花のさけりけるを人のたちとまりてみけるをよめる
みつね
わかやとにさける藤なみたちかへりすきかてにのみ人の見るらむ
よみ人しらす
いまもかもさきにほふらむ橘のこしまのさきの山吹の花
春雨ににほへる色もあかなくにかさへなつかし山吹の花
山吹はあやなゝさきそ花見むとうへけむ君かこよひこなくに
よしのかはのほとりに山吹のさけりけるをよめる
つらゆき

吉野河岸の山吹ふく風にそこの影さへうつろひにけり

題しらず　　読人しらず

かはつなくゐての山吹ちりにけり花のさかりにあはましものを

この哥はある人のいはく橘のきよともか哥也

清友　嵯峨后　檀林后父

春のうたとてよめる　　そせい

おもふとち春の山辺にうちむれてそこともいはぬたひねしてしか

春のとくすくるをよめる　　みつね

梓弓春たちしより年月のいるかことくもおもほゆるかな

やよひにうくひすのこゑのひさしうきこえさりけるをよめる　　つらゆき

なきとむる花しなけれはうくひすもはてはものうくなりぬへらなり

やよひのつこもりかたに山をこえけるに山河より花のなかれけるをよめる　　ふかやふ

花ちれる水のまにまにとめくれは山には春もなくなりにけり

春をおしみてよめる　　もとかた

おしめともとゝまらなくに春霞かへる道にしたちぬとおもへは

寛平御時きさいの宮のうたあはせのうた　　おきかせ

こゑたえすなけやうくひすひとゝせにふたゝひとたにくへき春かは

やよひのつこもりの日花つみよりかへりける
女ともを見てよめる　みつね

とゝむへき物とはなしにはかなくもちる花ことにたくふ心か

やよひのつこもりの日あめのふりけるにふちの
花ををりて人につかはしける

なりひらの朝臣

ぬれつゝそしゐておりつる年の内に春はいくかもあらしと思へは

亭子院の哥合のはるのはてのうた

けふのみと春をおもはぬ時たにも立ことやすき花のかけかは

みつね

古今和歌集巻第三

夏哥

題しらず　　読人しらず

わかやとの池の藤波さきにけり山郭公いつかきなかむ

この哥ある人のいはくかきのもとの人まろかなり

うつきにさけるさくらを見てよめる　　紀としさた

あはれてふことをあまたにやらしとや春におくれてひとりさくらむ

題しらす　　よみ人しらす

さ月まつ山郭公うちはふき今もなかなむこそのふるこゑ

伊勢

五月こはなきもふりなむ郭公またしきほとのこゑをきかはや

よみ人しらす

さ月まつ花たちはなのかをかけは昔の人の袖のかそする

いつのまにさ月きぬらむあしひきの山郭公今そなくなる

けさきなきいまたたひなる郭公花たちはなにやとはからなむ

おとは山をこえける時郭公のなくをききてよめる

きのとものり

おとは山けさこえくれは郭公こすゑはるかに今そなくなる

ほとときすのはしめてなきけるをききて

そせい

ほとゝきすはつこゑきけはあちきなくぬしさたまらぬこひせらるはた　そせい

ならのいそのかみてらにて郭公のなくをよめる

いそのかみふるき宮この郭公こゑはかりこそ昔なりけれ

題しらす　　よみ人しらす

夏山に鳴郭公心あらは物思我にこゑなきかせそ

ほとゝきすなく聲きけはわかれにしふるさとさへそこひしかりける

郭公なかなくさとのあまたあれはなをうとまれぬ思ものから

思ひいつるときはの山の郭公唐紅のふりいてゝそなく

こゑはしてなみたはみえぬ郭公わか衣手のひつをからなむ

あしひきの山ほとゝきすおりはへてたれかまさるとねをのみそなく

いまさらに山へかへるな郭公こゑのかきりはわかやとになけ

みくにのまち

やよやまて山郭公ことつてむわれ世中にすみわひぬとよ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

紀とものり

五月雨に物思ひをれは郭公夜ふかくなきていつちゆくらむ

夜やくらき道やまよへるほとゝきすわかやとをしもすきかてになく

大江千里

やとりせし花橘もかれなくになとほとゝきすこゑたえぬらむ

きのつらゆき

夏の夜のふすかとすれはほとゝきすなくひとこゑにあくるしのゝめ

みふのたゝみね

くるゝかとみれはあけぬる夏の夜をあかすとやなく山郭公

紀秋岑

夏山にこひしき人やいりにけむこゑふりたてゝなくほとゝきす

題しらす

よみ人しらす

こそのなつなきふるしてし郭公それかあらぬかこゑのかはらぬ

ほとゝきすのなくをきゝてよめる

つらゆき

五月雨のそらもとゝろに郭公なにをうしとかよたゝなく覧

さふらひにてをのこともさけたうへけるに

めしてほとゝきすまつうたよめとありけれは

みつね

ほとゝきすこゑもきこえす山ひこはほかになくねをこたへやはせぬ

山にほとゝきすのなきけるをきゝてよめる

つらゆき

郭公人まつ山になくなれはわれうちつけにこひまさりけり

はやくすみける所にて郭公のなきけるをきゝて

よめる

たゝみね

むかしへや今もこひしき時鳥ふるさとにしもなきてきつらむ

ほとゝきすのなきけるをきゝてよめる

みつね

ほとゝきす我とはなしに卯花のうき世中になきわたる覧

はちすの露をみてよめる

僧正遍昭

はちすはのにこりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあさむく

月のおもしろかりける夜あかつきかたによめる

ふかやふ

夏の夜はまたよひなからあけぬるを雲のいつこに月やとる覧

となりよりとこなつの花をこひにおこせたりけれは

をしみてこのうたをよみてつかはしける

みつね

ちりをたにすゑしとそ思ふさきしよりいもとわかぬるとこ夏の花

みな月のつこもりの日よめる

夏と秋とゆきかふそらのかよひちはかたへすゝしき風やふくらむ

古今和歌集巻第四

秋哥上

秋立日よめる　　藤原敏行朝臣

あききぬとめにはさやかに見えねとも風のおとにそおとろかれぬる

秋立日うへのをのこともかものかはらにかはせうえうしけるともにまかりてよめる

つらゆき

河風のすゝしくもあるかうちよする浪とゝもにや秋はたつらむ

題しらす　よみ人しらす

わかせこか衣のすそを吹かへしうらめつらしき秋のはつかせ

昨日こそはるへとかつゝいはのさくらなきそよきて秋風のふく

秋風乃吹にし日より久方の天の河らにたゝぬ日はなし

ひさかたのあまのかはらのわたしもりきみわたりなはかちかくしてよ

天河もみちをはしにわたせはやたなはたつめの秋をしもまつ

こひ／＼てあふ夜はこよひ天の河霧立わたりあけすもあらなむ

寛平は時なぬかの夜うへにさふらふをのこともうたてまつれとおほせられける時人にかはりてよめる

とものり

あまの河あさせしら浪たとりつゝわたりはてねはあけそしにける

おなし御時きさいの宮の歌合のうた

藤原おきかせ

契剱心そつらき織女の年にひとたひあふはあふかは

なぬかの日の夜よめる

凡河内みつね

年ことにあふとはすれとたなはたのぬるよのかすそすくなかりける

たなはたにかしつるいとのうちはへて年のをなかくこひやわたらむ

題しらに

そせい

こよひこむ人にはあはしたなはたのひさしきほとにまちもこそすれ

なぬかのよのあか月によめる

源むねゆきの朝臣

今はとてわかるゝ時は天の河わたらぬさきに袖そひちぬる

やうかの日よめる

みふのたゝみね

けふよりは今こむ年のきのふをそいつしかとのみまちわたるへき

題しらす　　よみ人しらす

このまよりもりくる月のかけみれは心つくしの秋はきにけり

おほかたの秋くるからにわか身こそかなしき物と思ひしりぬれ

わかためにくる秋にしもあらなくにむしのねきけはまつそかなしき

物ことに秋そかなしきもみちつゝうつろひゆくをかきりと思へは

ひとりぬるとこは草葉にあらねとも秋くるよひはつゆけかりけり

これさたのみこの家の歌合のうた　是貞　仁和第二　元右中将　母同寛平

いつはとは時はわかねと秋の夜そ物思ふことのかきりなりける

かむなりのつほに人〳〵あつまりて秋のよおしむ

うたよみけるついてによめる

みつね

かくはかりをしと思ふ夜をいたつらにねてあかすらむ人さへそうき

題しらす　　よみ人しらす

白雲にはねうちかはしとふかりのかすさへみゆる秋のよの月

さ夜中と夜はふけぬらしかりかねのきこゆるそらに月わたるみゆ

これさたのみこの家の歌合によめる

大江千里

月見れはちゝにものこそかなしけれわか身ひとつの秋にはあらねと

たゝみね

久方の月の桂も秋はなほもみちすれはやてりまさるらむ

月をよめる　在原元方

秋の夜の月のひかりしあかけれはくらふの山もこえぬへらなり

人のもとにまかれりける夜きりきりすのなきけるを
きゝてよめる　藤原忠房

きりきりすいたくなゝきそ秋の夜のなかき思ひは我そまされる

是貞のみこの家の哥合のうた
としゆきの朝臣

秋の夜のあくるもしらすなくむしはわかことものやかなしかるらん

題しらす　よみ人しらす

あきはきも色つきぬれはきりきりすわかねぬことやよるはかなしき

秋のよはつゆこそことにさむからし草むらことにむしのわふれは

君しのふ草にやつるゝふるさとはまつむしのねそかなしかりける

秋のゝに道もまとひぬまつむしのこゑするかたにやとやからまし

あきのゝに人まつむしのこゑすなりわれかとゆきていさとふらはむ

もみちはのちりてつもれるわかやとにたれをまつむしこゝらなくらむ

ひくらしのなきつるなへに日はくれぬと思ふは山のかけにそありける

ひくらしのなく山さとのゆふくれは風よりほかにとふ人もなし

はつかりをよめる　在原元方

まつ人にあらぬものからはつかりのけさなくこゑのめつらしきかな

是貞のみこの家の哥合のうた
とものり

秋風にはつかりかねそきこゆなるたかたまつさをかけてきつらむ

題しらす　よみ人しらす

わかかとにいなおほせとりのなくなへにけさ吹風にかりはきにけり

いとはやもなきぬるかりか白つゆのいろとる木ゝももみちあへなくに

春霞かすみていにしかりかねは今そなくなる秋きりのうへに

夜をさむみ衣かりかねなくなへにはきのしたはもうつろひにけり

このうたはある人のいはくかきのもとの人まろかなりと

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原菅根朝臣

秋風に声をほにあけてくる舟はあまのとわたるかりにそありける

かりのなくをきゝてよめる

みつね

うきことを思ひつらねてかりかねのなきこそわたれ秋のよなよな

これさたのみこの家の歌合のうた

たゝみね

山里は秋こそことにわひしけれしかのなくねにめをさましつゝ

よみ人しらす

奥山に紅葉ふみわけ鳴鹿の声きく時そ秋はかなしき

題しらす

秋はきにうらひれをれはあしひきの山したとよみしかのなくらむ

秋はきをしからみふせてなくしかのめにはみえすておとのさやけさ

これさたのみこの家の哥合によめる

藤原としゆきの朝臣

秋はきの花さきにけり高砂のおのへのしかは今やなくらん

むかしあひしりて侍ける人の秋の野にあひて
ものかたりしけるついてによめる

みつね

秋はきのふるえにさける花見れは本の心はわすれさりけり

題しらす

よみ人しらす

あきはきのしたはいろつく今よりやひとりある人のいねかてにする

なきわたる雁の涙やおちつらん物思やとのはきのうへのつゆ

はきのつゆ玉にぬかんとゝれはけぬよしみん人は枝なからみよ

ある人のいはくこの哥はならのみかとの御哥也と

おりてみはおちそしぬへき秋はきの枝もたはゝにをける白露

萩の花ちるらんをのゝつゆしもにぬれてをゆかんさよはふくとも

是貞のみこの家の哥合によめる

文屋あさやす

秋の野にをく白露は玉なれやつらぬきかくるくものいとすち

題しらす

僧正遍昭

名にめてゝおれるはかりそ女郎花われおちにきと人にかたるな

僧正遍昭かもとにならへまかりける時におとこ
山にてをみなへしをみてよめる

ふるのいまみち

をみなへしうしとみつゝそゆきすくるをとこ山にしたてりとおもへは
是貞のみこの家の歌合のうた　としゆきの朝臣
秋のゝにやとりはすへしをみなへし名をむつましみたひならなくに
題しらす　をのゝよしき
をみなへしおほかるのへにやとりせはあやなくあたの名をやたちなむ
朱雀院のをみなへしあはせによみてたてまつりける　左のおほいまうちきみ　本院贈太政大臣
女郎花秋のゝ風にうちなひき心ひとつをたれによすらむ
藤原定方朝臣　三条右大臣
秋ならてあふことかたきをみなへしあまのかはらにおひぬものゆへ

つらゆき
たか秋にあらぬものゆへをみなへしなそいろにいてゝまたきうつろふ
みつね
つまこふるしかそなくなる女郎花をのかすむのゝ花としらすや
をみなへし吹すきてくる秋風はめにはみえねとかこそしるけれ
たゝみね
人のみることやくるしきをみなへし秋きりにのみたちかくるらむ
ひとりのみなかむるよりは女郎花わかすむやとにうへてみましを
ものへまかりけるに人の家にをみなへしうへたりけるを
みてよめる
兼覧王

をみなへしうしろめたくもみゆるかなあれたるやとにひとりたてれは

寛平御時蔵人所のをのこともさかのに花みむとて
まかりたりける時かへるとてみなうたよみける
ついてによめる

平さたふん

花にあかてなにかへるらむをみなへしおほかるのへにねなましものを

これさたのみこの家の哥合によめる

としゆきの朝臣

なに人かきてぬきかけしふちはかまくる秋ことにのへをにほはす

ふちはかまをよみて人につかはしける

つらゆき

やとりせし人のかたみかふちはかまわすられかたきかににほひつつ

ふちはかまをよめる

そせい

ぬししらぬかこそにほへれ秋ののにたかぬきかけしふちはかまそも

題しらす

平貞文

今よりはうゑてたにみし花すすきほにいつる秋はわひしかりけり

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

ありはらのむねやな

秋の野の草のたもとか花すすきほにいててまねく袖とみゆらん

素性法師

我のみやあはれとおもはむきりきりすなくゆふかけのやまとなてしこ

題しらす　　よみ人しらす

みとりなるひとつ草とそ春はみし秋はいろ〳〵の花にそありける
もゝくさの花のひもとく秋の野に思ひたはれむ人なとかめそ
月草に衣はすらむあさつゆにぬれてのゝちはうつろひぬとも

仁和のみかとみこにおはしましける時ふるのたき
御覧せむとておはしましけるみちに遍昭かはゝの家
にやとりたまへりける時に庭を秋の野につくりておほむ
ものかたりのついてによみてたてまつりける

僧正遍昭

さとはあれて人はふりにしやとなれや庭もまかきも秋のゝらなる

古今和歌集巻第五

秋哥下

これさたのみこの家の哥合のうた

文屋やすひて

吹からに秋の草木のしをるれはむへ山風をあらしといふらむ
草も木も色かはれともわたつうみの浪の花にそ秋なかりける

秋の哥合しける時よめる

紀よしもち　淑望

もみちせぬときはの山は吹風のおとにや秋をきゝわたるらむ

題しらす　　よみ人しらす

霧立て鴈そなくなる片岡の朝の原ハもみちしぬらむ

神な月時雨もいまたふらなくにかねてうつろふ神なひのもり

ちはやふる神なひ山のもみちはにおもひはかけしうつろふものを

貞観の御時綾綺殿のまへにむめの木ありけり
にしのかたにさせりける枝のもみちはしめたりける
をうへにさふらふをのことものよみけるつい
てによめる　藤原かちおむ

おなしえをわきてこのはのうつろふは西こそ秋のはしめなりけれ

いし山にまうてける時をとは山のもみちを
みてよめる
つらゆき

秋風の吹にし日よりをとは山みねのこすゑもいろつきにけり

これさたのみこの家の哥合によめる
としゆきの朝臣

白露の色はひとつをいかにして秋のこのはをちゝにそむらむ

秋の夜の露をはつゆとおきなからかりのなみたや野へをそむらむ　壬生忠岑

秋の露いろいろことにおけはこそ山のこのはのちくさなるらめ

もる山のほとりにてよめる
つらゆき

白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらす色つきにけり

秋のうたとてよめる　在原もとかた

雨ふれと露ももらしをかさとりの山はいかてかもみちそめけむ

神のやしろのあたりをまかりけるときにいかきの
うちのもみちを見てよめる
つらゆき
ちはやふる神のいかきにはふくすも秋にはあへすうつろひにけり
是貞のみこの家の歌合によめる
たゝみね
あめふれはかさとり山のもみちはゝゆきかふ人のそてさへそてる
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
よみ人しらす
ちらねともかねてそおしきもみちはゝいまはかきりの色と見つれは
やまとのくにへまかりける時さほ山にきりのたてりけるを見てよめる
きのとものり
たかための錦なれはか秋きりのさほの山へをたちかくすらむ
是貞のみこの家の歌合のうた
よみ人しらす
秋きりはけさはなたちそさほ山のはゝそのもみちよそにても見む
秋のうたとてよめる
坂上これのり
さほ山のはゝその色はうすけれと秋はふかくもなりにけるかな
人のせんさいにきくにむすひつけてうへけるうた
在原なりひらの朝臣
うへしうへは秋なき時やさかさらむ花こそちらめねさへかれめや

寛平御時きくの花をよませたまうける

としゆきの朝臣

久方の雲のうへにてみる菊はあまつほしとぞあやまたれける

この歌はまだ殿上ゆるされざりける時にめしあげられてつかうまつれるとなむ

これさだのみこの家の歌合のうた

きのとものり

露ながらおりてかざさむ菊の花おいせぬ秋のひさしかるべく

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

大江千里

うゑし時花まちどほにありしきくうつろふ秋にあはむとやみし

おなじ御時せられける菊合にすはまをつくりて菊の花うゑたりけるにくはへたりける歌 ふきあげのはまのかたにきくうゑたりけるによめる

すがはらの朝臣

延喜元年左遷
贈位正一位太政大臣

秋風のふきあげにたてるしらぎくは花かあらぬか浪のよするか

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる

素性法師

ぬれてほす山路のきくのつゆのまにいつか千とせを我はへにけむ

きくの花のもとにて人のひとまてるかたをよめる

とものり

花みつゝ人まつ時は白妙の袖かとのみそあやまたれける

おほさはの池のかたにきくうへたるをよめる

ひともとゝ思ひし花をおほさはの池のそこにもたれかうへけむ

世中のはかなきことを思けるおりはきくの花
を見てよみける

つらゆき

秋の菊にほふかきりはかさしてむ花よりさきとしらぬわか身を

しらきくの花をよめる

凡河内みつね

心あてにおらはやおらむはつしものおきまとはせる白菊の花

これさたのみこの家の歌合のうた

よみ人しらす

いろかはる秋のきくをはひとゝせにふたゝひにほふ花とこそ見れ

仁和寺にきくの花めしける時にうたそへてたてまつれと
おほせられけれはよみてたてまつりける

平さたふん

秋をおきて時こそ有けれ菊の花うつろふからにいろのまされは

人の家なりけるきくの花をうつしうへたりける
をよめる

つらゆき

さきそめしやとしかはれはきくの花いろさへにこそうつろひにけれ

よみ人しらす

題しらす

さほ山のはゝそのもみちちりぬへみよるさへ見よとてらす月かけ

宮仕へひさしうつかうまつらで山さとにこ
もり侍りけるによめる　藤原関雄

奥山のいはかきもみぢちりぬへしてる日のひかりみる時なくて

題しらず　よみ人しらず

龍田河紅葉乱て流めり渡らば錦中やたえなむ　文武天皇

この哥はある人ならのみかどの御哥也となむ申す

たつた河もみぢはなかる神なびのみむろの山に時雨ふるらし

又はあすかゝはもみぢはなかる

こひしくは見てもしのはむもみぢはを吹なちらしそ山おろしの風　此哥不注人丸哥 他本又同

秋風にあへずちりぬるもみぢはのゆくへさだめぬ我ぞかなしき

あきはきぬ紅葉はやどにふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなし

ふみわけて更にやとはむもみぢはのふりかくしてし道とみながら

秋の月山辺さやかにてらせるはおつるもみぢのかすを見よとか

吹風の色のちくさに見えつるは秋のこのはのちればなりけり

せきを

霜のたてつゆのぬきこそよはからし山の錦のおればかつちる

うりむゐんの木のかげにたゝずみてよめる

僧正遍昭

わび人のわきてたちよるこのもとはたのむかげなくもみぢちりけり

二条の后の春宮のみやす所と申ける時に御屏風

龍田河にもみちなかれたるかたをかけりけるを題
にてよめる
そせい
もみちはのなかれてとまるみなとには紅深き浪やたつらむ
なりひらの朝臣
ちはやふる神世もきかす竜田河から紅に水くゝるとは
これさたのみこの家の哥合のうた
としゆきの朝臣
わかきつる方もしられすくらふ山木々のこのはのちるとまかふに
たゝみね
神なひのみむろの山を秋ゆけは錦たちきる心ちこそすれ
きた山にもみちをらむとてまかれりける時によめる
つらゆき
見る人もなくてちりぬる奥山のもみちは夜の錦なりけり
秋のうた
かねみの王
たつたひめたむくる神のあれはこそ秋のこのはのぬさとちるらめ
をのといふ所にすみ侍りける時もみちを見てよめる
つらゆき
秋の山もみちをぬさとたむくれはすむ我さへそたひこゝちする
神なひの山をすきて竜田河をわたりける時に
もみちのなかれけるをよめる
きよはらのふかやふ
神なひの山をすき行秋なれは竜田河にそぬさはたむくる

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

藤原おきかせ

白浪に秋のこのはのうかへるを
あまのなかせる舟かとそ見る

たつた河のほとりにてよめる

坂上是則

もみちはのなかれさりせはたつた河
水の秋をはたれかしらまし

志かの山こえにてよめる

はるみちのつらき

山川に風のかけたるしからみは
なかれもあへぬもみちなりけり

池のほとりにてもみちのちるをよめる

みつね

風ふけはおつるもみちは水きよみ
ちらぬかけさへそこに見えつゝ

亭子院の御屏風の絵に河わたらむとする人の
もみちのちる木のしたに馬をひかへてたてるを
よませ給ひけれはつかうまつりける

立とまり見てをわたらむもみちはゝ
雨とふるとも水はまさらし

これさたのみこの家の哥合のうた

たゝみね

山田もる秋のかりいほにおく露は
いなおほせ鳥の涙なりけり

題しらす

よみ人しらす

ほにもいてぬ山田をもるとふち衣
いなはの露にぬれぬ日そなき

かれる田におふるひつちのほにいてぬは世を今更に秋はてぬとか
きた山に僧正へんせうとたけかりにまかれりけるによめる
そせい法し
もみちはゝ袖にこきいれてもていてなむ秋は限とみむ人のため
寛平御時ふるきうたたてまつれとおほせられけれは
たつた河もみちはなかるといふうたをかきてその
おなし心をよめりける
おきかせ
み山よりおちくる水の色みてそ秋はかきりと思しりぬる
秋のはつる心をたつた河に思ひやりてよめる
つらゆき
年ことにもみちはなかすたつた河みなとや秋のとまりなるらん
なか月のつこもりの日大井にてよめる
ゆふつくよをくらの山になくしかのこゑのうちにや秋はくるらむ
おなしつこもりの日よめる
みつね
みちしらはたつねもゆかむもみちはをぬさとたむけて
秋はいにけり

古今和歌集巻第六

冬哥

題しらす　よみ人しらす

龍田河錦をりかく神な月しくれの雨をたてぬきにして

冬の哥とてよめる　源宗于朝臣

山さとは冬そさひしさまさりける人めも草もかれぬとおもへは

題しらす　よみ人しらす

おほそらの月のひかりしきよけれは影見し水そまつこほりける

ゆふされは衣手さむしみよしのゝよしのゝ山にみゆきふるらし

今よりはつきてふらなむわかやとのすゝきおしなみふれるしらゆき

ふる雪はかつそけぬらしあしひきの山のたきつせおとまさるなり

この河にもみちはなかるおく山の雪けの水そ今まさるらし

ふるさとはよしのゝ山しちかけれはひとひもみゆきふらぬ日はなし

わかやとは雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなけれは

冬のうたとてよめる　紀貫之

雪ふれは冬こもりせる草も木も春にしられぬ花そさきける

志かの山こえにてよめる　紀あきみね

しらゆきのところもわかすふりしけはいはほにもさく花とこそ見れ

ならの京にまかれりける時にやとれりける所にてよめる

坂上これのり

みよしのゝ山の白雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

ふちはらのおきかせ

浦ちかくふりくるゆきは白浪の末の松山こすかとそ見る

壬生忠岑

みよしのゝ山の白雪ふみわけて入にし人のおとつれもせぬ

志らゆきのふりてつもれる山さとはすむ人さへや思きゆらむ

雪のふれるを見てよめる

凡河内みつね

ゆきふりて人もかよはぬみちなれやあとはかもなく思きゆらむ

雪のふりけるをよめる

きよはらのふかやふ

冬なからそらより花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ

ゆきの木にふりかゝれるをよめる

つらゆき

冬こもり思かけぬをこのまより花と見るまて雪そふりける

やまとのくにゝまかれりける時に雪のふりけるを見て

よめる

坂上これのり

あさほらけありあけの月と見るまてによしのゝさとにふれる白雪

題しらす

よみ人しらす

けぬかうへに又もふりしけ春かすみたちなはみゆきまれにこそみめ

梅花それとも見えす久方のあまきる雪のなへてふれゝは
この哥はある人のいはく柿本人丸か哥也
むめの花にゆきのふれるをよめる
小野たかむらの朝臣
花の色は雪にましりて見えすとも かをたにゝほへ人のしるへく
雪のうちの梅の花をよめる
きのつらゆき
梅のかのふりおける雪にうつりせは たれかことことわきておらまし
ゆきのふりけるをよめる
紀とものり
雪ふれは木ことに花そさきにける いつれを梅とわきておらまし

ものへまかりける人をまちてしはすのつこもりによめる
みつね
わかまたぬ年はきぬれと冬草の かれにし人はおとつれもせす
としのはてによめる
在原もとかた
あらたまの年のをはりになることに 雪もわか身もふりまさりつゝ
寛平御時きさいの宮の哥合のうた
よみ人しらす
雪ふりて年のくれぬる時にこそ つゐにもみちぬ松もみえけれ
としのはてによめる
はるみちのつらき
昨日といひけふとくらしてあすか川 なかれてはやき月日なりけり

哥たてまつれとおほせられし時によみて
たてまつれる　　紀つらゆき
ゆく年のおしくもあるかなますかゞみみるかげさへにくれぬと
おもへば

古今和歌集巻第七

賀哥

題しらず　　　読人しらず

わがきみは千世にやちよにさゞれいしのいはほとなりてこけの
むすまで

わたつみのはまのまさごをかぞへつゝ君がちとせのありかずにせむ

しほの山さしでのいそにすむ千鳥きみがみ世をばやちよとぞなく

わがよはひきみがやちよにとりそへてとゞめおきてば思ひいでにせよ

仁和の御時僧正遍昭に七十の賀たまひける時の御哥

かくしつゝとにもかくにもながらへてきみがやちよにあふよしもがな

仁和のみかとのみこにおはしましける時に御をはの
やそちの賀にしろかねをつゑにつくれりけるをみて
かの御をはにかはりてよみける

僧正へんせう

ちはやふる神やきりけむつくからにちとせのさかもこえぬへらなり

ほりかはのおほいまうちきみの四十賀九条の家にて（昭宣公）（貞観十四年左大臣 卅七 右大将十七 年四十）
しける時によめる

在原業平朝臣

さくら花ちりかひくもれおいらくのこむといふなるみちまかふかに

さたときのみこのをはのよそちの賀を大井にて（貞辰 清和第七）
しける日よめる

きのこれをか（家本用之）（或説云 惟岳）

かめのおの山のいはねをとめておつる瀧の白玉千世のかすかも

さたやすのみこのきさいの宮の五十の賀たてまつりける（貞保 二品式部卿 清和第二 号南宮 母二条后 延長二年薨）
御屏風にさくらの花のちるしたに人の花
みたるかたかけるをよめる

ふちはらのおきかせ

いたつらにすくす月日はおもほえて花みてくらす春そすくなき

もとやすのみこの七十の賀のうしろの屏風に（本康 仁明第七 一品式部卿 号八条宮 延喜元年薨 母従四位上紀種子 名虎女）
よみてかきける

きのつらゆき

春くれはやとにまつさく梅花きみかちとせのかさしとそみる

素性法師

いにしへにありきあらすはしらねとも千とせのためし君にはしめむ

ふしておもひおきてかそふるよろつ世は神そしるらむわかきみのため

藤原三善か六十賀によみける　在原しけはる

鶴亀も千とせののちはしらなくにあかぬ心にまかせはててむ

このうたはある人在原のときはるかともいふ

よしみねのつねなりかよそちの賀にむすめにかはりてよみ侍りける

そせい法し

よろつ世を松にそきみをいはひつる千とせのかけにすまむと思へは

内侍のかみの右大将藤原朝臣の四十賀しける時に四季のゑかけるうしろの屏風にかきたりける

（満子　内大臣高藤女　[illegible]）

（大納言右大将定国　[illegible]　同年七月薨　四十）

うた

かすかのにわかなつみつゝよろつ世をいはふ心は神そしるらむ

山たかみくもゐにみゆるさくら花心のゆきてをらぬ日そなき

夏

めつらしきこゑならなくに郭公ここらの年をあかすもあるかな

秋

住のえの松を秋風吹くからにこゑうちそふるおきつしらなみ

千鳥なくさほの河きりたちぬらし山のこのはもいろまさりゆく
秋くれと色もかはらぬときは山よそのもみちを風そかしける

冬

白雪のふりしく時はみよしのゝ山した風に花そちりける

春宮のむまれ給へりける時にまゐりてよめる
（文彦太子 保明親王 延喜三年誕生 四年立太子 十九年元服 二月十日 十月）

典侍藤原よるかの朝臣（廿三年三月薨廿一）

峯たかきかすかの山にいつる日はくもる時なくてらすへらなり

古今和歌集巻第八

離別哥

題しらす　　在原行平朝臣

立わかれいなはの山の峯におふるまつとしきかは今かへりこむ

よみ人しらす

すかるなく秋のはきはらあさたちて旅行人をいつとかまたむ

かきりなき雲井のよそにわかるとも人を心にをくらさむやは

をのゝちふるかみちのくのすけにまかりける時にはゝの

よめる

たらちねのおやのまもりとあひそふる心許はせきなとゝめそ

さたときのみこの家にてふちはらのきよふか　清生
あふみのすけにまかりける時にむまのはなむけ
しける夜よめる

きのとしさた

けふわかれあすはあふみとおもへともよやふけぬらむ袖のつゆけき

こしへまかりける人によみてつかはしける

かへる山ありとはきけと春かすみたちわかれなはこひしかるへし

人のむまのはなむけにてよめる

きのつらゆき

をしむからこひしきものをしら雲のたちなむのちはなにここちせむ

ともたちの人のくにへまかりけるによめる

在原しけはる

わかれてはほとをへたつとおもはねとかつみなからにかねてこひしき

あつまの方へまかりける人によみてつかはしける

いかこのあつゆき

おもへともみをしわけねはめにみえぬこころをきみにたくへてそやる

あふさかにて人をわかれける時によめる

なにはのよろつを　万雄

相坂の関しまさしきものならはあかすわかるるきみをとゝめよ

題しらす

よみ人しらす

唐衣たつ日はきかしあさつゆのおきてしゆけはけぬへきものを

この哥はある人つかさをたまはりてあたらしき
めにつきてとしへてすみける人をすてゝ
たゝあすなむたつと許いへりける時にともかうも
いはてよみてつかはしける

ひたちへまかりける時にふちはらのきみとしに
よみてつかはしける

寵

武蔵守要君

あさなけにみへききみとしたのまねは思ひたちぬるくさまくらなり

きのむねさたかあつまへまかりける時に人の家に
やとりてあかつきいてたつとてまかり申しけれは女の
よみていたせりける

よみ人しらす

えそしらぬ今心みよいのちあらは我やわするゝ人やとはぬと

あひしりて侍ける人のあつまの方へまかりけるを
おくるとてよめる

ふかやふ

雲井にもかよふ心のおくれねはわかると人にみゆはかりなり

とものあつまへまかりける時によめる

よしみねのひてなり

白雲のこなたかなたにたちわかれ心をぬさとくたく旅かな

みちのくへまかりける人によみてつかはしける

つらゆき

白雲のやへにかさなるをちにてもおもはむ人に心へたつな

人をわかれける時によめる

わかれてふことはいろにもあらなくにこゝろにしみてわひしかるらむ

あひしれりける人のこしのくにゝまかりてとし
へて京にまうてきて又かへりける時によめる

凡河内みつね

かへる山なにそはありてあるかひはきてもとまらぬなにこそありけれ

こしのくにへまかりける人によみてつかはしける

よそにのみこひやわたらむしら山の雪みるへくもあらぬわかみは

おとはの山のほとりにて人をわかるとてよめる

つらゆき

おとは山こたかくなきて郭公きみかわかれををしむへらなり

藤原ののちかけかからもののつかひになか月の
つこもりかたにまかりけるにうへのをのこともさけ
たうひけるついてによめる

藤原のかねもち 兼茂 延長元年 参議

もろともになきてとゝめよきり〳〵す秋のわかれはをしくやはあらぬ

平もとのり 元規 蔵人右衛門尉

秋きりのともにたちいてゝわかれなははれぬおもひにこひやわたらむ

源のさねかつくしへゆあみむとてまかりける時
山さきにてわかれをしみける所にてよめる

しろめ

いのちたに心にかなふものならはなにかわかれのかなしからまし

山さきより神なひのもりまておくりに人〳〵
まかりてかへりかてにしてわかれをしみけるによめる

源さね

人やりの道ならなくにおほかたはいきうしといひていさかへりなむ

今はこれよりかへりねとさねかいひけるおりによみける

藤原かねもち

したはれてきにし心の身にしあれはかへるさまには道もしられす

藤原のこれをかむさしのすけにまかりける時におくりにあふさかをこゆとてよみける

つらゆき

かつこえてわかれもゆくか逢坂は人たのめなる名にこそありけれ

おほえのちふるかこしへまかりけるむまのはなむけによめる

藤原かねすけの朝臣

きみかゆくこしのしら山しらねともゆきのまにまにあとはたつねむ

人の花山にまうてきてゆふさりつかたかへりなむとしける時によめる

僧正遍昭

ゆふくれのまかきは山と見えなゝむよるはこえしとやとりとるへく

山にのほりてかへりまうてきて人〳〵わかれける
ついてによめる

幽仙法師

別をは山のさくらにまかせてむとめむとめしは花のまにまに

うりむゐんのみこの舎利会に山にのほりて
かへりけるにさくらの花のもとにてよめる

僧正へんせう

山風にさくらふきまきみたれなむ花のまきれに立とまるへく

幽仙法師

ことならは君とまるへくにほはなむかへすは花のうきにやはあらぬ

仁和のみかとみこにおはしましける時にふるのたきを
御覧しにおはしましてかへりたまひけるによめる

兼藝法師

あかすしてわかるゝ涙たきにそふ水まさるとやしもはみゆらむ

かむなりのつほにめしたりける日おほみきなとたうへて
あめのいたうふりけれはゆふさりまて侍りて
まかりいてけるをりにさかつきをとりて

つらゆき

秋萩の花をは雨にぬらせとも君をはましてをしとこそ思へ

とよめりける返し

兼覧王

をしむ覧人の心をしらぬまに秋のしくれと身そふりにける

かねみのおほきみにはしめてものかたりして
わかれける時によめる

みつね

わかるれとうれしくもあるかこよひよりあひみぬさきになにをこひまし

題しらず　　読人しらず

あかずしてわかるゝ袖のしら玉をきみがかたみとつゝみてぞ行

限なくおもふ涙にそほちぬる袖はかわかじあはむ日までに

かきくらしことはふらなむ春雨にぬれぎぬきせて君をとゞめむ

しひて行人をとゞめむ桜花いづれを道とまどふまでちれ

しがの山ごえにて石井のもとにてものいひける人のわかれけるおりによめる　　つらゆき

むすぶ手のしづくににごる山の井のあかでも人にわかれぬるかな

道にあへりける人の車に物をいひつきてわかれける所にてよめる　　とものり

したのおびの道はかたがたわかるともゆきめぐりてもあはむとぞおもふ

古今和歌集巻第九

羇旅哥

もろこしにて月を見てよみける

安倍仲麿

あまの原ふりさけ見ればかすがなるみかさの山にいでし月かも

この哥は昔なかまろをもろこしにものならはしにつかはしたりけるにあまたの年をへてえかへりまうでこざりけるをこのくにより又つかひまかりいたりけるにたぐひてまうできなむとていでたちけるにめいしうといふ所のうみべにてかのくにの人むまのはなむけしけり夜

よるになりて月のいとおもしろくさしい
でたりけるを見てよめるとなむかたりつたふる

おきのくにゝなかされける時に舟にのりて
いでたつとて京なる人のもとにつかはしける

小野たかむらの朝臣

わたの原やそしまかけてこきいてぬと人にはつけよあまのつり舟

題しらず
よみ人しらず

宮こいてゝけふみかの原いつみ河かはかせさむし衣かせ山

ほの〳〵とあかしのうらのあさきりに島かくれゆく舟をしそ思ふ

このうたはある人のいはくかきのもとの人まろ
かうたなり

あつまの方へともとする人ひとりふたりいさな
ひていきけりみかはのくにやつはしといふ所に
いたれりけるにその河のほとりにかきつはた
いとおもしろくさけりけるを見て木のかけに
おりゐてかきつはたといふいつもしをくのかしらに
すゑてたひの心をよまむとてよめる

在原業平朝臣

唐衣きつゝなれにしつましあれははる〴〵きぬるたひをしそ思ふ

むさしのくにとしもつふさのくにとの中にある
すみた河のほとりにいたりてみやこのいと

こひしうおほえられてすみた河のほとりに
おりゐて思やれはかきりなくとをくもきにける
かなと思わひてあるにわたしもりはや舟
にのれ日もくれぬといひけれは舟にのりてわ
たらむとするにみな人ものわひしくて京
に思ふ人なくしもあらぬにさるおりし
しろきとりのはしとあしとあかき河のほとりに
あそひける京にはみえぬとりなれはみな
人見しらすわたしもりにこれはなに鳥そと
とひけれはこれなむ宮ことりといふをききて

よめる
名にしおはゝいさこととはむ宮こ鳥わか思ふ人は有やなしやと
歎しに　よみつゝらに
北へ行かゝるくるまにはせてこしかすへてこてかつてかつて
この辛もあまへわたこ女ともとよへのくまへ
さわたわゆこころわいてらてすゑくちみ
まかつてよみわたて女ひとわ京へかへりなん
よそのはきいろをきこてしあつとるむし上
あはきの方より京へまてくとてみちよそてゐる
わと　書くかゝひすめ
山くすみのかすみうちしきそれ家このさうかあるらん

こしのくにへまかりける時しら山を見てよめる

みつね

きえはつる時しなけれはこしちなるしら山のなはゆきにそありける

あつまへまかりける時みちにてよめる

つらゆき

いとによる物ならなくにわかれちの心ほそくもおもほゆるかな

かひのくにへまかりける時みちにてよめる

みつね

夜をさむみをくはつしもをはらひつゝ草の枕にあまたゝひねぬ

たちまのくにのゆへまかりける時ふたみのうら
といふ所にとまりてゆふさりのかれいひたうへ
けるにともにありける人〳〵のうたよみけるついてに
よめる

ふちはらのかねすけ

ゆふつく夜おほつかなきをたまくしけふたみの浦はあけてこそみめ

これたかのみこのともにかりにまかりける時にあまの
かはといふ所の河のほとりにおりゐてさけ
なとのみけるついてにみこのいひけらくかり
してあまのかはらにいたるといふ心をよみて
はさかつきはさせといひけれはよめる

なりひらの朝臣
かりくらしたなはたつめにやとからむあまのかはらに我はきにけり
みこのうたをかへす〳〵よみつゝかへしえせすなり
にけれはともに侍てよめる
きのありつね
ひとゝせにひとたひきますきみまてはやとかす人もあらしとそ思
朱雀院のならにおはしましたりける時に
たむけ山にてよみける
すかはらの朝臣
このたひはぬさもとりあへすたむけ山
紅葉の錦神のまにまに
素性法師
たむけにはつゝりの袖もきるへきに
もみちにあける神やかへさむ

古今和歌集巻第十

物名

うくひす　　藤原としゆきの朝臣

心から花のしつくにそほちつゝうくひすとのみ鳥のなくらん

ほとゝきす

くへきほとときすきぬれやまちわひてなくなるこゑの人をとよむる

うつせみ　　在原しけはる

浪のうつせみれは玉そみたれけるひろはゝ袖にはかなからむや

返し　　壬生忠岑

たもとよりはなれて玉をつゝまめやこれなむそれとうつせみむかし

うめ

あなうめにつねなるへくもみえぬかなこひしかるへきかはにほひつゝ

かにはさくら　　つらゆき

かつけともなみのなかにはさくられて風吹ことにうきしつむ玉

すもゝの花

今いくか春しなけれはうくひすも物はなかめて思ふへらなり

からもゝの花　　ふかやふ

あふからもものはなほこそかなしけれわかれむ事をかねて思へは

たちはな　　をのゝしけかけ

あしひきの山たちはなれゆく雲のやとりさためぬ世にこそ有けれ

をかたまの木　　とものり

みよしのゝよしのゝたきにうかひいつるあはをかたまのきゆとみつらむ

やゆのきの木　よきつらに

秋ときぬ今やまのきのきわくにはするすかのしか風のさしさよ

あふりこう

かく許あかひのかれはきえ〳〵あいつてしとおもいはるかき

人めゆへのちよあかのきるけくわかてきかや思ゐはむ

くさに

心ぬれたのちたあくそよなする花を思ふすともなき手

さうひ　てゆき

秋をけさうかよそえつる花のいろをあくるゝもとふへわか

なとゝなつし　ともの〳〵わ

夫つゆをさよめくとやさくつよの花えそえも心をとこすし

あきはゆきをわけつかちて花みむと今日の山をみなつはゆき

朱雀院のをとこをつてあくせの時よをとこなつて

とよふすをくのしらにきさてしめつ

はるゆき

をくら山ふれそちるらしなくつのへよふむ秋をまつ〳〵あきさき

こさらうの〳〵れし　ともの〳〵わ

あきらのくるわ〳〵わまつゆのまなくはいと思ふちも

夫をに　よき〳〵つらに

かわなへていまふつさとの花をんしとふをりはかうつるかなら

あうさむの〳〵れし　ともの〳〵わ

わすれとつまれしかさしくとわかるさむのくるすくれはやこくらすくろ

わかれ　淡人しるに

あるとみてそのひろうきうつせんのよをそむくや思ふらむ

まうし　やさへの苔寛　矢田了

うちつゝみうしろや花の色をみむきそしらつゆのうしろ許を

二条の后春宮のみやすん所とやうちめよめと

よみわかれきせわかるをよまませさうらふ

文臣やすひて

花の木よあるはしめともはきしそわかれぬ此のみすらめとかは

志のみくさ　きのしはら

山さみつねよあしのすさとそれかともの人は花うらわかう

やさし　年あつゆき

ほくきに峯の雲や雨しきにしあかうきさけと　かうらしとるき

からさき　よきへしるに

空蝉のからを木ことよとむれとさのゆふ色をみぬる　かうしき

かきるくさ　ゆやよ

うきよの夢はなすまゝのくさましうつゝさきあかねんを

まつわこけ　そのむこのそうそ　高尚

花の色そらひはらこけれをあてうつゆえさめくる

すつそけ　志けくら

いうとてつゆをさのしようくれを花わひしらにあくのゆく

かゝさけ　かゝのわのかはきこ

さ夜ふけてなかはたけゆく久方の月ふきかへせ秋の山かせ

わらひ　　真せい法し

煙たちもゆとも見えぬ草のはをたれかわらひとなつけそめけむ

さゝ　まつ　ひは　はせをは　　きのめのと

いさゝめに時まつまにそ日はへぬる心はせをは人にみえつゝ

なし　なつめ　くるみ　　兵衛

あちきなしなけきなつめそうき事にあひくる身をはすてぬものから

からこと　　安倍清行朝臣

浪のをとのけさからことにきこゆるは春のしらへやあらたまるらむ

いかゝさき　　かねみのおほきみ

かちにあたる浪のしつくを春なれはいかゝさきちる花と見さらむ

からさき　　阿保経覧

かの方にいつからさきにわたりけむ浪ちはあとものこらさりけり

伊勢

浪の花おきからさきてちりくめり水の春とは風やなるらむ

かみやかは　　つらゆき

うはたまのわかくろかみやかはるらむかゝみのかけにふれるしらゆき

よとかは

あしひきの山邊にをれは白雲のいかにせよとかはるゝ時なき

かくの　　そせ見ね

夏草のうへはしけれるぬま水のゆく方のなきわかこゝろかな

かつらのみや　　源ほとこす　　忠

秋くれと月のかつらのみやはなるひかりを花とちらすはかりを

百和香

花ことにあかすちらしし風なれはいくそはくわかうしとかは思ふ

よみ人しらす

すみなかし　　志けはる

春霞なかしかよひちなかりせは秋くるかりはかへらさらまし

おき火　　みやこのよしか　　都良香

流れいつる方たに見えぬ涙河おきひむ時やそこはしられむ

ちまき　　大江千里

のちまきのをくれておふるなへなれとあたにはならぬたのみとそきく

はをはしめるをはてにてなかめをかけて時の哥よめと人のいひけれはよめる

僧正聖宝

花のなかめにあくやとてわけゆけはこゝろそともにちりぬへらなる

古今和歌集巻第十一

恋歌一

題しらす　読人しらす

ほとゝきすなくや五月のあやめ草あやめもしらぬこひもするかな

素性法師

おとにのみきくのしら露よるはおきてひるは思ひにあへすけぬへし

紀つらゆき

よしの河いはなみたかくゆく水のはやくそ人を思ひそめてし

藤原勝臣

白浪のあともなき方にゆく舟も風そたよりのしるへなりける

在原もとかた

おとは山おとにきゝつゝ相坂の関のこなたにとしをふるかな

たちかへりあはれとそ思ふよそにても人に心をおきつしら浪

つらゆき

世中はかくこそありけれ吹風のめに見ぬ人もこひしかりけり

右近のむまはのひをりの日むかひにたてたりける車のしたすたれより女のかほのほのかに見えけれはよむてつかはしける

在原なりひらの朝臣

見すもあらす見もせぬ人のこひしくはあやなくけふやなかめくらさむ

返し

よみ人しらす

しるしらぬなにかあやなくわきていはむ思ひのみこそしるへなりけれ

かすかの乃田つかまよりわかなはけふのためにそありける
みな女のとしに家をうつすてつかいせむかな
みふのたゝみね
かたの乃雪ふみわけておひそくる草のつまよりきこえくる
ひとの花はなし所まかせてちとせまて
今のことまのちよにまさるてつかはそ
つらゆき
山かくす霞のまからほのかにもみえし人こそこひしかりけれ
題しらす
もとすけ
さくらはなあかぬおもひのあやしきまてに人をまつころかな

九條右大臣
まつ乃みつのまこ恋をまつしたわたるころのめの梅を思ふ
つらゆき
あつともなくぬるよのにほふ梅乃かをきゝてこひわたるかな
読人しらす
かすかをこゝろにかなわすそあまりかなしきを人の
ゆふくれも雲のいろてよ地よ思ふあまりかなしきをこそ
からころも思ふあまりて我をこそ恋しき人につらからめ
はなはともなく人をやわかくこゝろのかくともなくきえぬまたい
ちるやうかその中のゆめすゝきひとりもこゝろをつくねらは
なし

わかこひはむなしきそらにみちぬらし思やれともゆくかたもなし

するかなるたこのうら浪たゝぬ日はあれとも君をこひぬ日はなし

夕つくよさすやをかへの松のはのいつともわかぬこひもするかな

あしひきの山した水のこかくれてたきつ心をせきそかねつる

吉野河いはきりとほし行水のおとにはたてしこひはしぬとも

山たかみしたゆく水のしたにのみ流てこひむこひはしぬとも

思ひいつるときはの山のいはつゝしいはねはこそあれこひしき物を

ひとしれすおもへはくるし紅のすゑつむ花のいろにいてなむ

秋の野のをはなにましりさく花の色にやこひむあふよしをなみ

わかそのゝ梅のほつえに鴬のねになきぬへきこひもするかな

あしひきの山郭公わかことや君にこひつゝいねかてにする

夏なれはやとにふすふるかやり火のいつまてわか身したもえをせむ

恋せしとみたらし河にせしみそき神はうけすそなりにけらしも

あはれてふことたになくはなにをかはこひのみたれのつかねをにせむ

おもふにはしのふることそまけにける色にはいてしと思ひしものを

わかこひを人しるらめやしきたへの枕のみこそしらはしるらめ

あさちふのをのゝしのはらしのふとも人しるらめやいふ人なしに

ひとしれぬおもひやなそとあしかきのまちかけれともあふよしのなき

おもふともこふともあはむものなれやゆふてもたゆくとくるしたひも

いてわれを人なとかめそおほ舟のゆたのたゆたに物思ころそ

伊勢乃海につりするあまのうけなれや心ひとつをさためかねつる

いせの海のあまのつりなはうちはへてくるしとのみや思ひわたらむ

涙河なにみなかみをたつねけむ物思時のわか身なりけり

たねしあれはいはにもまつはおひにけりこひをしこひはあはさらめやも

あさなく立かはきりのそらにのみうきて思ひのあるよなりけり

わすらるゝ時しなけれはあしたつのおもひみたれてねをのみそなく

唐衣ひもゆふくれになる時はかへすかへすそ人はこひしき

よひよひに枕さためむ方もなしいかにねしよかゆめにみえけむ

こひしきにいのちをかふる物ならはしにはやすくそあるへかりける

人の身もならはしものをあはすしていさ心みむこひやしぬると

しのふれはくるしきものを人しれす思てふことたれにかたらむ

こむよにもはやなりなゝむめのまへにつれなき人をむかしとおもはむ

つれもなき人をこふとて山ひこのこたへするまてなけきつるかな

ゆく水にかすかくよりもはかなきはおもはぬ人をおもふなりけり

人を思ふ心はわれにあらねはや身のまとふたにしられさるらむ

思やるさかひはるかになりやするまとふゆめちにあふ人のなき
夢のうちにあひ見むことをたのみつゝくらせるよゐはねむかたもなし
こひしねとするわさならしむはたまのよるはすからに夢に見えつゝ
なみた河枕なかるゝうきねには夢もさたかに見えすそありける
こひすれはわか身はかけとなりにけりさりとて人にそはぬものゆへ
かゝり火にあらぬわか身のなそもかく涙の河にうきてもゆらむ
篝火のかけとなる身のわひしきはなかれてしたにもゆるなりけり
はやきせに見るめおひせはわか袖の涙の河にうへましものを
おきへにもよらぬ玉もの浪のうへにみたれてのみやこひわたらなむ

あしかものさはく入江の白浪のしらすや人をかくこひむとは
ひとしれぬおもひをつねにするかなる冨士の山こそわか身なりけれ
とふとりのこゑもきこえぬおく山のふかき心を人はしらなむ
相坂のゆふつけ鳥もわかことく人やこひしきねのみなくらん
あふさかのせきになかるゝいはし水いはて心に思ひこそすれ
うき草のうへはしけれるふちなれやふかき心をしる人のなき
打わひてよはゝむこゑに山ひこのこたへぬ山はあらしとそ思
心かへするものにもかかたこひはくるしきものと人にしらせむ
よそにしてこふれはくるしいれひものおなし心にいさむすひてむ

春たてはきゆる氷のゝこりなく君か心はわれにとけなむ
あけたてはせみのおりはへなきくらしよるはほたるのもえこそわたれ
夏むしの身をいたつらになすこともひとつおもひによりてなりけり
ゆふされはいとゝひかたきわか袖に秋のつゆさへをきそはりつゝ
いつとてもこひしからすはあらねとも秋のゆふへはあやしかりけり
秋の田のほにこそ人をこひさらめなとか心にわすれしもせむ
あきの田のほのうへをてらすいなつまのひかりのまにもわれやわするゝ
ひとめもるわれかはあやな花すゝきなとかほにいてゝこひすしもあらむ
あはゆきのたまれはかてにくたけつゝわか物思ひのしけきころかな
おく山のすかのねしのきふるゆきのけぬとかいはむこひのしけきに

古今和歌集巻第十二

戀哥二

題しらす　　小野小町

思ひつゝぬれはや人のみえつらむ夢としりせはさめさらましを
うたゝねにこひしき人をみてしより夢てふ物はたのみそめてき
いとせめてこひしき時はむは玉の夜の衣をかへしてそきる

素性法師

秋風の身にさむけれはつれもなき人をそたのむくるゝ夜ことに
しもついつもてらに人のわさしける日しむせい法
しのたうしにていへりける事はをうたによみて

小野小町かもとにつかはせりける

あへのきよゆきの朝臣

つゝめとも袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの涙なりけり

こまち

おろかなる涙そ袖に玉はなす我はせきあへすたきつせなれは

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原敏行朝臣

こひわひてうちぬるなかにゆきかよふ夢のたゝちはうつゝならなむ

すみの江の岸による浪よるさへやゆめのかよひち人めよくらん

をのゝよしき

わかこひはみ山かくれの草なれやしけさまされとしる人のなき

紀とものり

よひのまもはかなくみゆる夏虫にまとひまされるこひもするかな

ゆふされは蛍よりけにもゆれとも光見ねはや人のつれなき

さゝのはにおく霜よりもひとりぬるわか衣手そさえまさりける

わかやとの菊のかきねにおく霜のきえかへりてそこひしかりける

かはの瀬になひく玉もの見かくれて人にしられぬこひもするかな

みふのたゝみね

かきくらしふる白雪のしたきえにきえて物思ふころにもあるかな

藤原おきかせ

きみこふる涙のとこにみちぬれはみをつくしとそわれはなりける

志ぬるいのちいきもやするとこゝろみに玉の緒許あはむといは南

わひぬれはしひてわすれむとおもへとも夢といふ物そ人たのめなる

読人しらす

わりなくもねてもさめてもこひしきか心をいつちやらはわすれむ

こひしきにわひてたましひまとひなはむなしきからの名にやのこらむ

きのつらゆき

君こふる涙しなくはからころもむねのあたりは色もえなまし

題しらす

世とゝもに流てそゆく涙河冬もこほらぬみなわなりけり

夢路にも露やおくらむ夜もすからかよへる袖のひちてかわかぬ

素性法師

はかなくてゆめにも人を見つる夜はあしたのとこそおきうかりけれ

藤原たゝふさ

いつはりの涙なりせは唐衣しのひに袖はしほらさらまし

大江千里

ねになきてひちにしかとも春雨にぬれにし袖ととはゝこたへむ

としゆき

わかことくものやかなしきほとゝきす時そともなくよたゝなく覧

つらゆき

さ月山こすゑをたかみほとゝきすなくねそらなるこひもする哉

凡河内みつね

秋霧乃はるゝときなき心にはたちゐのそらもおもほえなくに
清原ふかやふ
虫乃ことこゑにたてゝはなかねとも涙のみこそしたになかるれ
これさたのみこの家の歌合のうた
よみ人しらす
秋なれは山とよむまてなくしかにわれおとらめやひとりぬるよは
題しらす
つらゆき
秋乃のにみたれてさける花の色のちくさに物を思ふころかな
みつね
ひとりして物をおもへは秋のよのいなはのそよといふ人のなき
ふかやふ
人を思ふ心はかりにあらねともくもゐにのみもなきわたるかな
たゝみね
秋風にかきなすことの声にさへはかなく人のこひしかるらん
つらゆき
まこもかるよとのさは水あめふれはつねよりことにまさるわか恋
やまとに侍ける人につかはしける
こえぬまはよしのゝ山のさくら花人つてにのみきゝわたるかな
やよひ許にものいひける人のもとに又人
まかりつゝせうそこすときゝてよみてつかはしける
つゆならぬ心を花におきそめて風ふくことに物思ひそつく
題しらす
坂上これのり

むねをかのおほより
わかこひはくらふの山のはてゝ花まちくらすとやかすみたつらし

冬河のうへはこほれるわれなれや下に流てこひわたるらむ

たゝみね
たきつせにねさしとゝめぬうき草のうきたるこひも我はするかな

とものり
よゐ〳〵にぬきてわかぬるかり衣かけておもはぬ時のまもなし

あつ路のさやの中山なか〳〵になにしか人を思ひそめけむ

しきたへの枕のしたに海はあれと人をみるめはおひすそありける

としをへてきえぬおもひはありなからよるのたもとは猶こほりけり

つらゆき
わかこひはしらぬ山地にあらなくに迷ふこゝろそわひしかりける

紅のふりいてつゝなく涙にはたもとのみこそ色まさりけれ

白玉と見えし涙も年ふれはから紅にうつろひにけり

みつね
夏虫をなにかいひけむ心から我もおもひにもえぬへらなり

たゝみね
風ふけは峯にわかるゝ白雲のたえてつれなき君か心か

月かけにわか身をかふる物ならはつれなき人もあはれとや見む

ふかやふ
こひしなはたか名はたゝし世中のつねなき物といひはなすとも

はつゆき

けふのくものかみのめてたきにしけきかつらひしらんかや
てらおもて月かへりさしさゆるよいはかきかれけれはよ
ひとしれぬおもひのみこそかはしとかはるそきをこえ秋のみちしら

ともかた

春よりそいはねゆかみすせ河辺まかりててこころしきゆき

みつね

夜をのみおもひねはねむゆめなれはわすれつつみえつつゆめわ

さたかた

いのちをしはかてやしくあつおえそてねゆめのさむ給ね

さうこちのつゝき

梓弓いそへ大かとするわか身はよるこころは人もなのへ

みつね

わかひとゆくえて志てにそてふしあふくを限と思ふ行
秋のみちのついなかなひこちもあかそてすゝてする草葉しら

あかやふ

今こそやこひをましきをあいえむとこの木からかわちかわる

みつね

そのまつあくそそついつてわさこなかねんをくれてかさなむ

ことのり

いろやえなますそるのあはものをあみゆうくおしつゝえ

古今和歌集巻第十三

恋哥三

やよひのついたちより志のひに人にものら
いひてのちにあめのそほふりけるによみてつかはし
ける
在原業平朝臣

おきもせすねもせてよるをあかしては春のものとてなかめ
くらしつ

なりひらの朝臣の家に侍ける女のもとに
よみてつかはしける
としゆきの朝臣

つれつれのなかめにまさる涙河袖のみぬれてあふよしもなし

かの女にかはりてかへしによめる
なりひらの朝臣

あさみこそ袖はひつらめ涙河身さへなかるときかはたのまむ

題しらす
読人しらす

よるへなみ身をこそとほくへたてつれ心は君かかけとなりにき

あはぬ夜のふるしら雪とつもりなはわれさへともにけぬへきものを

このうたはある人のいはく柿本人麿か哥也

なりひらの朝臣

秋ののにささわけしあさの袖よりもあはてこしよそひちまさりける

小野小町

みるめなきわか身をうらとしらねはやかれなてあまのあしたゆくくる

源宗于朝臣

あはすしてこよひあけなは春の日のなかくや人をつらしとおもはむ

みふのたゝみね

有明乃つれなく見えし別より暁許うきものはなし

ありはらのもとかた

逢事のなきさにしよる浪なれはうらみてのみそたちかへりける

よみ人しらす

かねてより風にさきたつ浪なれやあふことなきにまたき立覧

たゝみね

みちのくにありといふなる名とり河なき名とりてはくるしかりけり

みはるのありすけ

あやなくてまたきなき名のたつた河わたらてやまむものならなくに

もとかた

人はいさ我はなき名のおしけれは昔も今もしらすとをいはむ

よみ人しらす

こりすまに又もなき名はたちぬへし人にくからぬよにしすまへは

ひむかしの五条わたりに人をしりおきてまかりかよひ
けりしのひなる所なりけれはかとよりしもえ
いらてかきのくつれよりかよひけるをたひかさな
りけれはあるしきゝつけてかのみちに夜ことに

人をふせてまもらすれはいきけれとえあはて
のみかへりてよみてやれる

なりひらの朝臣

ひとしれぬわかかよひちのせきもりはよひよひことにうちもねなむ

題しらす

つらゆき

しのふれとこひしき時はあしひきの山よりつきのいてゝこそくれ

よみ人しらす

こひこひてまれにこよひそ相坂のゆふつけとりはなかすもあらなむ

をのゝこまち

秋の夜も名のみなりけりあふといへはことそともなくあけぬるものを

凡河内みつね

なかしとも思ひそはてぬ昔よりあふ人からの秋のよなれは

よみ人しらす

しのゝめのほからほからとあけゆけはをのかきぬきぬなるそかなしき

藤原くにつねの朝臣

あけぬとて今はの心つくからになといひしらぬおもひそふらむ

寛平の時きさいの宮の歌合のうた

としゆきの朝臣

あけぬとてかへる道にはこきたれて雨も涙もふりそほちつゝ

題しらす

寵

一読 ウツク
一流 チヨウ 用之

しのゝめのわかれをゝしみわれそまつとりよりさきになきはしめつる

読人しらす

ほとゝきす夢かうつゝかあさつゆのおきてわかれし暁のこゑ

玉匣あけはきみかなたちぬへみ夜ふかくこしを人みけむかも

大江千里

けさはしもおきけむ方もしらさりつ思ひいつるそきえてかなしき

ひとにあひてあしたによみてつかはしける

なりひらの朝臣

ねぬるよのゆめをはかなみまとろめはいやはかなにもなりまさるかな

業平朝臣の伊勢のくにゝまかりたりける時斎宮なりける人にいとみそかにあひて又のあしたに

ひとやるすへなくておもひをるあひたに

女のもとよりおこせたりける

よみ人しらす

きみやこしわれやゆきけむおもほえす夢かうつゝかねてかさめてか

なりひらの朝臣

かきくらす心のやみにまとひにき夢うつゝとはよひとさためよ

よみ人しらす

むはたまのやみのうつゝはさたかなる夢にいくらもまさらさりけり

さ夜ふけてあまのとわたる月かけにあかすも君をあひみつるかな

君か名もわか名もたてしなにはなるみつともいふなあひきともいはし

名とり河瀬々のむもれ木あらはれはいかにせむとかあひみそめけむ

吉野河水のこゝろはやくとも瀧のおとにはたてしとそ思

こひしくはしたにをおもへ紫乃ねすりの衣色にいつなゆめ

をのゝはるかせ

花すゝきほにいてゝこひは名ををしみしたゆふひものむすほれつゝ

たちはなのきよきかしのひにあひしれりける

女のもとよりをこせたりける

よみ人しらに

おもふとちひとりひとりかこひしなはたれによそへてふち衣きむ

返し

たちはなのきよき

なきこふる涙に袖のそほちなはぬきかへかてらよるこそはきめ

題しらに　　こまち

うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをよくと見るかわひしさ

かきりなきおもひのまゝによるもこむ夢ちをさへに人はとかめし

ゆめちにはあしもやすめすかよへともうつゝにひとめ見しことはあらす

讀人しらに

おもへとも人めつゝみのたかけれは河と見なからえこそわたらね

たきつせのはやき心をなにしかも人めつゝみのせきとゝむらむ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

きのとものり

紅乃色にはいてしかくれぬのしたにかよひてこひはしぬとも

題しらす　　　みつね

冬の池にすむにほとりのつれもなくそこにかよふと人にしらすな

さゝのはにおくはつしもの夜をさむみしみはつくともいろにいてめや

読人しらす

山しなのおとはの山のおとにたにひとのしるへくわかこひめかも

このうたある人あふみのうねめのとなむ申す

きよはらのふかやふ

みつしほのなかれひるまをあひかたみみるめのうらによるをこそまて

平貞文

しらかはのしらすともいはしそこきよみ流て世々にすまむと思ふ

とものり

したにのみこふれはくるしたまのをのたえてみたれむ人なとかめそ

わかこひをしのひかねてはあしひきの山橘の色にいてぬへし

よみ人しらす

おほかたはわかなもみなとこきいてなむ世をうみへたにみるめすくなし

平貞文

まくらよりまたしる人もなきこひをなみたせきあへすもらしつるかな

よみ人しらす

風ふけは浪打岸の松なれやねにあらはれてなきぬへらなり

このうたはある人のいはくかきのもとの人まろかなり

池にすむなををしとりの水をあさみかくるとすれとあらはれにけり

あふことは玉のを許名のたつはよしのゝ川のたきつせのこと

むら鳥のたちにしわか名今更に
ことなしふともしるしあらめや
きみによりわか名は花に春霞野にも山にも
たちみちにけり
伊勢
しるといへは枕さへせてねしものを
ちりならぬ名のそらにたつ覧

古今和歌集巻第十四
恋哥四
題しらす
よみ人しらす
みちのくのあさかのぬまの花かつみかつみる人に
こひやわたらむ
あひみすはこひしきこともなからまし
をとにそ人をきくへかりける
つらゆき
いその神ふるのなかみちなかなかにみすはこひしと
おもはましやは
ふちはらのたゝゆき
きみといへはみまれみすまれ
ふしのねのめつらしけなくもゆるわかこひ
伊勢

夢にたにみゆとはみえしあさなくわかおもかけにはつる身なれは
よみ人しらす
いしまゆく水の白浪たちかへりかくこそはみめあかすもあるかな
伊勢のあまのあさなゆふなにかつくてふみるめに人をあくよしもかな
とものり
春霞たなひく山の桜花みれともあかぬ君にもあるかな
ふかやふ
心をそわりなき物と思ぬるみる物からやこひしかるへき
凡河内みつね
かれはてむのちをもしらて夏草のふかくも人のおもほゆるかな
よみ人しらす
あすかゝはふちはせになる世なりとも思そめてむ人はわすれし
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
おもふてふことのはのみや秋をへていろもかはらぬものにはあるらむ
題しらす
さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらむ宇治の橋姫
又はうちのたまひめ
君やこむ我やゆかむのいさよひにまきのいたともさゝすねにけり
そせい法し
今こむといひしはかりに長月のありあけの月をまちいてつるかな
よみ人しらす
月夜よし夜よしと人につけやらはこてふににたりまたすしもあらす

きみこすハねやへもいらしこ紫わかもとゆひに霜ハおくとも

宮木のゝもとあらのこはきつゆをおもみ風をまつこと君をこそまて

あなこひし今もみてしか山かつのかきほにさけるやまとなてしこ

津のくにのなにはおもはす山しろのとはにあひみむことをのみこそ

つらゆき

しきしまのやまとにはあらぬからころもころもへすしてあふよしもかな

ふかやふ

こひしとはたかなつけゝむことならむしぬとそたゝにいふへかりける

よみ人しらす

みよしのゝおほかはのへのふちなみのなみにおもはゝわかこひめやは

かくこひむものとはわれも思ひにき心のうらそまさしかりける

あまのはらふみとゝろかしなる神もおもふなかをはさくるものかは

梓弓ひきのゝつゝらすゑつゐにわか思ふ人にことのしけゝむ

この哥はある人あめのみかとのあふみのうね
めにたまへるとなむ申す

夏ひきのてひきのいとをくりかへしことしけくともたえむとおもふな

このうたはかへしによみてたてまつりけるとなむ

さと人のことは夏のゝしけくともかれゆく君にあはさらめやは

藤原敏行朝臣のなりひらの朝臣の家なりける
女をあひしりてふみつかはせりけることはに
いまゝうてくあめのふりけるをなむ見わつらひ侍る
といへりけるをきゝてかの女にかはりてよめりける

在原業平朝臣

かすかすにおもひおもはすとひかたみ身をしる雨はふりそまされる

ある女のなりひらの朝臣をところさためすありきすとおもひてよみてつかはしける

よみ人しらす

おほぬさのひくてあまたになりぬれはおもへとえこそたのまさりけれ

返し　なりひらの朝臣

おほぬさと名にこそたてれなかれてもつゐによるせはありてふものを

題しらす　よみ人しらす

すまのあまのしほやくけふり風をいたみおもはぬかたにたなひきにけり

玉かつらはふ木あまたになりぬれはたえぬ心のうれしけもなし

たか里によかれをしてか郭公たゝこゝにしもねたるこゑする

いて人はことのみそよき月草のうつし心はいろことにして

いつはりのなきよなりせはいかはかり人のことのはうれしからまし

いつはりと思ものから今更にたかまことをかわれはたのまむ

素性法師

秋風に山のこのはのうつろへは人の心もいかゝとそ思

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

とものり

蝉のこゑきけはかなしな夏衣うすくや人のならむと思へは

題しらす

よみ人しらす

うつせみの世のひとことのしけゝれはわすれぬものゝかれぬへら也
あかてこそおもはむなかははなれなめそをたにのちのわすれかたみに
わすれなむと思ふ心のつくからにありしよりけにまつそこひしき
わすれなむ我をうらむな郭公人の秋にはあはむともせす
たえすゆくあすかの川のよとみなは心あるとや人の思はむ
このうたある人のいはくなかとみのあつま人か哥也
よと河のよとむと人は見るらめと流て深き心ある物を
そせい法し
そこひなきふちやはさはく山河のあさきせにこそあた浪はたて
よみ人しらず

紅乃はつ花そめの色ふかく思ひし心われわすれめや
かはらの左大臣
みちのく乃志のふもちすりたれゆへにみたれむと思ふ我ならなくに
よみ人しらず
おもふよりいかにせよとか秋風になひくあさちのいろことになる
ちゝの色にうつろふらめとしらなくに心し秋のもみちならねは
をのゝこまち
あまのすむさとのしるへにあらなくにうらみむとのみ人のいふらむ
しもつけのをむね
くもり日のかけとしなれるわれなれはめにこそ見えね身をははなれす

つらゆき
色もなき心を人にそめしよりうつろはむとはおもほえなくに
よみ人しらず
めつらしき人を見むとやしかもせぬわかしたひものとけわたるらむ
かけろふのそれかあらぬか春雨のふるひとなれは袖そぬれぬる
ほりえこくたなゝし小舟こきかへりおなし人にやこひわたりなむ
伊勢
わたつみとあれにしとこを今さらにはらはゝ袖やあわとうきなむ
つらゆき
いにしへに猶立かへる心かなこひしきことにものわすれせて
人をしのひにあひしりてあひかたくありけれは
その家のあたりをまかりありきけるおりに
かりのなくをきゝてよみてつかはしける
大伴のくろぬし
思ひいてゝこひしき時ははつかりのなきてわたると人しるらめや
右のおほいまうちきみすますなりにけれは
かのむかしをこせたりけるふみともをとりあつめて
かへすとてよみてをくりける
典侍藤原よるかの朝臣
たのめこし事の葉今はかへしてむわか身ふるれはをきところなし
返し
近院の右のおほいまうちきみ　能有 文徳源氏 右大臣 左大将

今こそかへすもののくひんかなきさてをのゝものゝうかゝことやこひむ

題しらに

よみ人の朝臣

玉梓乃道はつねにもまとはなむ人をとふとも我かとおもはむ

読人しらに

遠てといふかわれてもゆつるむもひてゆくこゝのあはれさへのさるもし

中納言源のゝほる（昇 延喜八年二月中納言 十四年民部卿 大納言）の朝臣のあふみのすけにまかりける時

よみてやれりける

閑院

相坂乃ゆふつけ鳥にあらはこそきみかゆきゝをなくなくも見め

題しらす

伊勢

あふさかとよあぬものゝかつさめに人のいのあれてこゆらむ

寵龍

山のはのかきほよそへつあをてらん人をくれとしもつてなし

さかゐのひとさね（酒井人真）

おほかたの人このひきの物のうらのえ物思とはすありつらむ

よみ人しらに

あまそのかことも我えなりせむよ見てもんのあくはさすくよ

おやのまゝわかる人のむすめよりしのかよあるて

そのこゝいかるあひさはおやのうとひかれた

いさきのへつとてそをあむやきをきてつれよ

かゝうのうちをゝへすとてよある

たきのせ

あふまでのかたみとてこそとゞめけめ涙にうかぶもくづなりけり おきかぜ

題しらず　よみ人しらず

かたみこそ今はあたなれこれなくはわするゝ時もあらましものを

古今和歌集巻第十五

戀哥五

五條のきさいの宮のにしのたいにすみける人に
ほいにはあらでものいひわたりけるをむ月
の十日あまりになむほかへかくれにける
あり所はきゝけれどえものもいはで又のとしの春
むめの花さかりに月のおもしろかりける夜
こぞをこひてかのにしのたいにいきて月のかた
ぶくまであばらなるいたじきにふせりてよめる

在原なりひらの朝臣

月やあらぬ春や昔の春ならぬわか身ひとつはもとの身にして

題しらす

藤原なかひらの朝臣 仲平

花すゝき我こそしたに思ひしかほにいてゝ人にむすはれにけり

藤原かねすけの朝臣

よそにのみきかまし物を音羽河わたるとなしにみなれそめけむ

凡河内みつね

わかことく我をおもはむ人もかなさてもやうきと世を心みむ

もとかた

久方のあまつそらにもすまなくに人はよそにそ思ふへらなる

よみ人しらす

見てもまたまたもみまくのほしけれはなるゝを人はいとふへらなり

きのとものり

雲もなくなきたる朝の我なれやいとはれてのみよをはへぬらむ

よみ人しらす

花かたみめならふ人のあまたあれはわすられぬらむかすならぬ身は

うきめのみおひて流るゝ浦なれはかりにのみこそあまはよるらめ

伊勢

あひにあひて物思ふころのわか袖にやとる月さへぬるゝかほなる

よみ人しらす

秋ならておくしら露はねさめするわかたまくらのしつくなりけり

すまのあまのしほやき衣をさをあらみまとほにあれやきみかきまさぬ

山しろのよとのわかこもかりにたにこぬ人たのむ我そはかなき
あひみねはこひこそまされみなせ河なにゝふかめて思ひそめけむ
暁のしきのはねかきもゝはかき君かこぬ夜は我そかすかく
玉かつら今はたゆとや吹風のをとにも人のきこえさる覧
わか袖にまたき時雨のふりぬるは君か心に秋やきぬらむ
山の井のあさき心もおもはぬをかけ許のみ人の見ゆ覧
忘草たねとらましをあふ事のいとかくかたき物としりせは
こふれともあふよのなきは忘草ゆめちにさへやおひしけ覧
ゆめにたにあふことかたくなりゆくは我やいをねぬ人やわするゝ
もろこしも夢にみしかはちかりきおもはぬなかそはるけかりける
きむけい法し
ひとりのみなかめふるやのつまなれは人を忍の草そおひける
さたのほる　備中守 貞朝臣登 仁明御子
僧正へんせう
わかやとは道もなきまてあれにけりつれなき人をまつとせしまに
今こむといひてわかれしあしたより思くらしのねをのみそなく
よみ人しらす
こめやとは思ものからひくらしのなくゆふくれはたちまたれつゝ
いまはとわひし物をさゝかにの衣にかゝりわれをたのむる

今はこしと思ふものからわすれつゝまたるゝ事のまたもやまぬか

月夜にはこぬ人またるかきくもり雨もふらなむわひつゝもねむ

うへていにし秋田かるまて見えこねはけさはつかりのねにそなきぬる

こぬ人を松ゆふくれの秋風はいかにふけはかわひしかるらむ

ひさしくもなりにけるかな住のえの松はくるしき物にそありける

かねみのおほきみ

住の江乃松ほとひさしくなりぬれはあしたつのねになかぬ日はなし

なかひらの朝臣あひしりて侍りけるをかれかたになりにけれはちゝかやまとのかみに侍りけるもとへまかるとてよみてつかはしける

伊勢

三わの山いかにまちみむ年ふともたつぬる人もあらしと思へは

雲林院のみこ 常康親王 仁明御子

吹まよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人の心の

小野こまち

今はとてわか身時雨にふりぬれは事のはさへにうつろひにけり

返し 小野貞樹

人を思ふ心のこのはにあらはこそ風のまにまにちりもみたれめ

なりひらの朝臣きのありつねかむすめにすみけるをうらむる事ありてしはしのあひたひるはきてゆふさりはかへりのみしけれはよみてつかはしける

西園くさのよそうまき〳〵のあわゆくつほすつまめまえんゆつ
なし
なかなかひとの朝皃
ゆきのそわうしよのみしてあつことえかつのつ山の風をやとあわ
題しらす
かけのわのなほきこ
唐衣なしたえまこちゆつりしわかけてのこやえこひむ思し
とものわ
秋風をあをわけてしをふつあくは〳〵のいのちうしよすつ覧
源宗平(?)朝臣
法れもあくるなり〳〵の木のえう秋かわさまのもとちるなる
こゝちうこまつわそうこうあひしわて侍るゝ〳〵の
こちてこゝちをこうわてのちそつて〳〵わかれいよもて

法のもしなる
兵衛
藤原高経朝臣女
まその山ふもとを見そうそわまし法さき〳〵わさくつこえてとて
あひしけわなう〳〵のやうやくかれうこよなわ
なうあひさまやけるうちのをよふとをさして
つのをやわなる
こまちのあね
ゆすきてのれ引をのてあき地まえ今いおもうしえすなえなう
お思なうころものへさらわなうみちよ野火の
もえうろをみてよめる
伊勢
冬のれのいへとわつなをおもわせえもえてもいろをさうし地を
題しらに
とものわ

水乃あわ乃きえてうき身といひなから流て猶もたのまるゝかな

よミ人しらす

みなせ河ありてゆく水なくはこそつゐにわか身をたえぬと思はめ

みつね

吉野河よしや人こそつらからめはやくいひてし事はわすれし

よミ人しらす

世中乃人の心は花そめのうつろひやすき色にそ有ける

心こそうたてにくけれそめさらはうつろふ事もをしからましや

こまち

色みえてうつろふ物は世中の人の心の花にそ有ける

よミ人しらす

我のみやよをうくひすとなきわひむ人の心の花とちりなは

そせい法し

おもふともかれなむ人をいかゝせむあかすちりぬる花とこそみめ

よミ人しらす

今はとて君かかれなはわかやとの花をはひとり見てやしのはむ

むねゆきのあそむ

忘草かれもやするとつれもなき人の心にしもはおかなむ

寛平御時御屏風にうたかゝせ給ける時よミてかきける

そせい法し

わすれくさなにをかたねと思ひしはつれなき人の心なりけり

題しらす

秋の田のいねてふこともかけなくになにをうしとか人のかるらむ

きのつらゆき

はつかりのなきこそわたれ世中の人の心の秋しうけれは

よみ人しらす

あはれともうしとも物を思ふ時なとかなみたのいとなかるらむ

身をうしと思ふにきえぬ物なれはかくてもへぬる世にこそ有けれ

典侍藤原なほいこの朝臣

あまのかるもにすむ虫のわれからとねをこそなかめ世をはうらみし

いなは

ちこよのおもひとこの女

あひ見ぬもうきもわか身のから衣思ひしらすもとくるひもか

寛平御時きさいの宮の哥合の哥

すかのゝたゝをむ 忠臣

つれなきを今はこひしと思へともこゝろよはくもおつる涙か

題しらす

伊勢

人しれすたえなましかはわひつゝもなきなそとたにいはまし物を

よみ人しらす

それをたに思ふこととてわかやとを見きとないひそ人のきかくに

あふことのもはらたえぬる時にこそ人のこひしき事もしりけれ

わひはつる時さへ物のかなしきはいつこをしのふ涙なるらむ

藤原おきかせ

恨てもなきてもいはむ方なき鏡にみゆるかけならすして

読人しらす

ゆふされは人なきとこをうちはらひなけかむためとなれるわか身か

わたつみのわか身こす浪立かへりあまのすむてふうらみつるかな

あらをたをあらすきかへしかへしても人の心を見てこそやまめ

有そうみのはまのまさこゝとたのめしはわするゝことのかすにそ有ける

あしへより雲ゐをさしてゆくかりのいやとほさかるわか身かなしも

しくれつゝもみつるよりもことのはの心の秋にあふそわひしき

小町

秋風乃ふきとふきぬるむさしのはなへてくさはのいろかはりけり

秋風にあふたのみこそかなしけれわか身むなしくなりぬとおもへは

平貞文

あき風のふきうらかへすくすのはのうらみても猶うらめしき哉

よみ人しらす

秋といへはよそにそきゝしあた人の我をふるせる名にこそ有けれ

又

わすらるゝ身をうちはしの中たえて人もかよはぬ年そへにける

坂上これのり

あふことをなからのはしのなからへてこひわたるまに年そへにける

とものり

うきなからけぬるあはともなりななむなかれてとたにたのまれぬ身は

流てハいもせの山乃なかにおつる吉野の河乃よしや世中

読人しらず

古今和歌集巻第十六

哀傷哥

いもうとの身まかりける時よみける

小野のたかむらの朝臣

なく涙雨とふらなむわたり河水まさりなばかへりくるがに

さきのおほきおほいまうちぎみ（忠仁公）をしら河のあたりにおくりける夜よめる

素性法し

延長七年比叡坂下出家也 仍雖不詳人前ト書也 前僧正中也

ちのなみだおちてぞたぎつ白河は君が世までの名にこそ有けれ

ほりかはのおほきおほいまうちぎみ身まかりにける時に深草の山におさめてけるのちによみける

昭宣公 寛平三年正月薨 五十六 太政大臣 関白始

僧都勝延

空蝉はからを見つゝもなくさめつ深草の山煙たにたて

かむつけのみねお　岑雄

深草乃のへのさくらし心あらはことし許はすみそめにさけ

藤原のとしゆきの朝臣のみまかりにける時によ

みてかの家につかはしける

きのとものり

ねてもみゆねてもみえけりおほかたはうつせみの世そゆめにはありける

あひしれりける人のみまかりにける時によめる

きのつらゆき

夢とこそいふへかりけれ世中にうつゝあるものと思ひけるかな

あひしれりける人のみまかりにける時によめる

みふのたゝみね

ぬるかうちにみるをのみやは夢といはむはかなき世をもうつゝとはみす

あねのみまかりにける時によめる

せをせけはふちとなりてもよとみけりわかれをとむるしからみそなき

藤原のたゝふさかむかしあひしりて侍りける人

のみまかりにける時にとふらひにつかはすとてよめる

閑院

さきたゝぬくいのやちたひかなしきはなかるゝ水のかへりこぬなり

きのとものりかみまかりにける時によめる

つらゆき

あすしらぬわか身とおもへとくれぬまのけふは人こそかなしかりけれ

たゝみね

時しもあれ秋やは人のわかるへきあるをみるたにこひしきものを

はゝのおもひにてよめる

凡河内みつね

神な月時雨にぬるゝもみちはゝたゝわひ人のたもとなりけり

ちゝのおもひにてよめる

たゝみね

ふち衣はつるゝいとはわひ人の涙の玉のをとそなりける

おもひに侍りけるとしの秋山てらへまかりけるみちにてよめる

つらゆき

あさつゆのおくての山田かりそめにうき世中を思ひぬるかな

おもひに侍りける人をとふらひにまかりてよめる

たゝみね

すみそめのきみかたもとは雲なれやたえす涙の雨とのみふる

女のおやのおもひにて山てらに侍りけるをある人のとふらひつかはせりけれは返事によめる

よみ人しらす

あしひきの山へに今はすみそめの衣の袖のひる時もなし

諒闇のとし池のほとりの花をみてよめる

たかむらの朝臣

水のおもにしつく花の色さやかにもきみかみかけのおもほゆるかな

深草のみかとの御國忌の日よめる

文屋やすひて

草ふかき霞の谷にかけかくしてる日のくれしけふにやはあらぬ

深草乃（仁明）みかとの御時に蔵人頭にてよるひるな
れつかうまつりけるを諒闇になりにけれはさらに
世にもましらすしてひえの山にのほりてかしら
おろしてけりそのまたのとしみな人御ふくぬきて
あるはかうふりたまはりなとよろこひけるをきゝ
てよめる

僧正遍昭　蔵人頭左近少将良岑宗貞

みな人は花の衣になりぬなりこけのたもとよかわきたにせよ

河原乃おほいまうちきみの身まかりての秋かの
嵯峨源氏融
寛平七年八月廿五日薨　七十三

家乃ほとりをまかりけるにもみちの色またふかく
もならさりけるを見てかの家によみていれたりける

近院の右のおほいまうちきみ　寛平七年大納言左大将兼皇太子傅
能有　文徳源氏

うちつけにさひしくもあるかもみちはもぬしなきやとは色なかりけり

ふちはらのたかつねの朝臣の身まかりての又の
としのなつほとゝきすのなきけるをきゝてよめる

つらゆき

ほとゝきすけさなくこゑにおとろけは君にわかれし時にそ有ける

さくらをうへてありけるにやうやく花さきぬへ
き時にかのうへける人身まかりにけれはその花

をみてよめる　　　　きのもちゆき
茂行
花よりも人こそあだになりにけれいづれをさきにこひむとかみし
あるじみまかりにける人の家の梅の花をみて
よめる
いろもかもむかしのこさににほへども　　つらゆき
うゑけむ人のかげぞこひしき
河原の左のおほいまうちぎみの身まかりてのち
かの家にまかりてありけるにしほがまといふ所の
さまをつくれりけるをみてよめる
きみまさでけぶりたえにししほがまのうらさびしくもみえわたるかな
藤原のとしもと（利基　高藤公男）の朝臣の右近中将にてすみ
侍りけるざうしの身まかりてのち人もすまず
なりにけるを秋の夜ふけてものよりまうで
きけるついでにみいれければもとありしせんざいも
いとしげくあれたりけるをみてはやくそこに
侍りければむかしを思ひやりてよみける
みはるのありすけ
御春有助
きみがうゑしひとむらすすきむしのねのしげきのべともなりにけるかな
これたかのみこのちちの侍りけむ時によめりけむうたどもとこひければ
かきておくれりけるおくによみてかけりける
とものり

ことならはことのはさへもきえなゝむみれはなみたのたきまさりけり

題しらす　よみ人しらす

なき人のやとにかよはゝ郭公かけてねにのみなくとつけなむ

たれみよと花さけるらむ白雲のたつのとはやくなりにしものを

式部卿のみこ（敦慶）閑院の五のみこにすみわたりけるを
いくはくもあらて女みこの身まかりにける時に
かのみこすみけるちやうのかたひらのひもにふみ
をゆひつけたりけるをとりて見れはむかしの
てにてこのうたをなむかきつけたりける

かすくに我をわすれぬものならは山のかすみをあはれとはみよ

おとこの人のくにゝまかれりけるまに女にはかに
やまひをしていとよはくなりにける時よみおきて
身まかりにける　よみ人しらす

こゑをたにきかてわかるゝたまよりもなきとこにねむ君そかなしき

やまひにわつらひ侍りける秋心地のたのもしけなく
おほえけれはよみて
人のもとにつかはしける

大江千里

もみちはを風にまかせて見るよりもはかなき物はいのちなりけり

身まかりなむとてよめる

藤原これもと

露をなどあだなる物と思ひけむわが身も草におかぬ許を

やまひしてよわくなりにける時よめる

なりひらの朝臣

つひにゆくみちとはかねてききしかどきのふけふとはおもはざりしを

かひのくにゝあひしりて侍ける人とぶらはむとてまかりけるを
みちなかにてにはかにやまひをしていまくとなりにければ
よみて京にもてまかりて
母にみせよといひて人につけ侍りける

在原しげはる

かりそめのゆきかひぢとぞ思ひし今はかぎりのかどでなりけり

古今和歌集巻第十七

雑哥上

題しらず

よみ人しらず

わがうへに露ぞおくなる天の河とわたる舟のかいのしづくか

おもふどちまとゐせる夜は唐錦たゝまくをしき物にぞありける

うれしきをなにゝつゝまむ唐衣たもとゆたかにたてといはましを

限なききみがためにとをる花はときしもわかぬ物にぞありける

ある人のいはく、この哥はさきのおほいまうちぎみの也

紫のひともとゆへにむさしのゝ草はみながらあはれとぞみる

めのおとうとをもて侍ける人にうへのきぬを
おくるとてよみてやりける

なりひらの朝臣

むらさきの色こき時はめもはるに野なる草木そわかれさりける

大納言ふちはらのくにつねの朝臣宰相より中納
国経 寛平六年五月廿日任中納言即従三位
言になりける時そめぬうへのきぬあやをゝ
くるとてよめる

近院右のおほいまうちきみ
于時大納言右大将皇太子傅

いろなしと人やみるらむ昔よりふかき心にそめてしものを

伊そのかみのなむまつか宮つかへもせていそのかみとい
ふ所にこもり侍けるをにはかにかうふりたまは
れはよろこひいひつかはすとてよみてつ
かはしける

ふるのいまみち

日のひかりやふしわかねはいその神ふりにしさとに花もさきけり

二条のきさきのまた東宮のみやすん所と申ける
高子 貞観八年十二月女御十九年十二月廿九日皇子十年三月女御太子
時におほはらのにまうてたまひける日よめる
元慶元年正月即位日為中宮 六年正月為皇太后宮

なりひらの朝臣
春宮母儀女御也

おほはらやをしほの山もけふこそは神よのことも思ひいつらめ

五節のまひめを見てよめる

よしみねのむねさた

あまつかせ雲のかよひちふきとちよをとめのすかたしはしとゝめむ

五節のあしたにかむさしの玉のおちたりけるを見てたかならむととふらひてよめる

河原の左のおほいまうちきみ

ぬしやたれとへとしら玉いはなくにさらはなへてやあはれとおもはむ

寛平御時うへのさふらひに侍けるをのこともかめをもたせてきさいの宮の御方におほみきのおろしときこえにたてまつりたりけるを蔵人ともわらひてかめをおまへにもていてゝともかくもいはすなりにけれはつかひのかへりきてさなむありつるといひけれは蔵人のなかにおくりける

としゆきの朝臣

玉たれのこかめやいつらこよろきのいその浪わけおきにいてにけり

女ともの見てわらひけれはよめる

けむけいほうし

かたちこそみ山かくれのくち木なれ心は花になさはなりなむ

方たかへに人の家にまかれりける時にあるしのきぬをきせたりけるをあしたにかへすとてよみける

きのとものり

蝉のはのよるの衣はうすけれとうつりかこくもにほひぬるかな

題しらす

よみ人しらす

まちいつる月をもあらぬかたの山のあなたも情つもせ
わか心なくはれぬわつはしるやなをまてまた山まてる月をみて
おほろなる月をみてはこれをたのむとはへのおとするなかに
月おもしろくてなほ河内みつよのまつしたきかわ
そらになかめ

ありひくの朝に

きのふのゆき

かたえしをとかくもあかぬ月のそのいさなひとあらしはふく
池に月のみえけるをよめる
あまつかき物を思ひてをみるうこに山のはいてゝいつる月け
影しらす　よそへしらに

あさの河雲のみかそてをやれはひかりとくめす月かなみて
かの月すて月のくもりて山のはとえあるかなおなすてうちよりわたる
これらのみこのかわしたるとてまさらわてやとわ
まつてこそ夜ひとよさそをのみものうちわを
しらるに十一日の月もかくれなむとしたる
おりにみこたてまつらへいりなむとしけれは
みゆかる

ありひくの朝に

あかなくにまたきも月のかくるゝか山のはにけてそいれすもあらなむ

慧子 代姑務院
天安元年二月
廢之 其事
秘世莫知之

四日ゝの御みかとの内侍に靡院に依なるのあきら
慧子 母藤列子 従五位上是雄女
けいこのみこをもちあやまちしありとして斎院を

若先是又
有此事ん
遂被廢ノ元慶
五年正月六日薨
以述子乃香院 母同作高 二年言退

かへられむとしけるをそのことやみにけれはよめる

あま敬信　よろつの頭の毎

おほそらをてりゆく月しきよけれは雲かくせともひかりけなくに

題しらす　よみ人しらす

いその神ふるからをのゝもとかしは本の心はわすられなくに

いにしへの野中の清水ぬるけれともとの心をしる人そくむ

いにしへのしつのをたまきいやしきもよきもさかりはありし物也

今こそあれ我も昔はをとこ山さかゆく時もありこしものを

世中にふりぬる物はつのくにのなからのはしと我となりけり

さゝの葉にふりつむ雪のうれをおもみ本くたちゆくわかさかりはも

おほあらきの森の下草おいぬれはこまもすさめすかる人もなし

又は　さくらあさのをふの下草

かそふれはとまらぬものをとしといひてことしはいたくおいそしにける

おしてるやなにはのみつにやくしほのからくも我はおいにけるかな

又は　おほとものみつのはまへに

おいらくのこむとしりせはかとさしてなしとこたへてあはさらましを

このみつの歌は昔ありける三人のおきなのよめるとなむ

さかさまに年もゆかなむとりもあへすすくるよはひやともにかへると

とりとむる物にしあらねは年月をあはれあなうとすくしつるかな

とゝめあへすむへもとしとはいはれけりしかもつれなくすくるよはひか

鏡山いさたちよりて見てゆかむ年へぬる身はおいやしぬると

この歌はある人のいはく大伴のくろぬしか也

なりひらの朝臣のはゝのみこ（伊登内親王 桓武皇女 貞観三年九月薨）なかをかにすみ侍ける時になりひら宮つかへすとて時〻もえまかりとふらはす侍けれはしはすはかりにはゝのみこのもとよりとみの事とて文をもてまうてきたりあけて見れはことはゝなくてありけるうた

おいぬれはさらぬ別のありといへはいよ〳〵見まくほしき君かな

返し　業平朝臣

世中にさらぬわかれのなくもかな千代もとなけく人の子のため

寛平御時きさいの宮のうたあはせのうた

ありはらのむねやな

しらゆきのやへふりしけるかへる山かへる〳〵もおいにけるかな

おなし御時のうへのさふらひにてをのこともにおほみきたまひておほみあそひありけるついてに

つかうまつれる　としゆきの朝臣

おいぬとてなとかわか身をせめきけむおいすはけふにあはましものを

題しらす　よみ人しらす

ちはやふる宇治のはしもりなれをしそあはれとは思ふ年のへぬれは

我見てもひさしくなりぬすみよしのきしのひめ松いくよへぬらむ

住吉乃岸のひめ松人ならはいく世へしかととはましものを
梓弓いそへ乃こ松たか世にかよろつよかねてたねをまきけむ
この哥ハある人のいはく、かきのもとの人まろか也
かくしつゝよをやつくさむたかさこのをのへにたてる松ならなくに
藤原おきかせ
たれをかもしる人にせむたかさこの松も昔の友ならなくに
よみ人しらす
わたつ海乃おきつしほあひにうかふあわのきえぬものからよる方もなし
わたつ海のかさしにさせる白妙の浪もてゆへるあはちしま山
わたのはらよせくる浪のしはしはも見まくのほしき玉津嶋かも

なにはかたしほみちくらしあま衣たみのゝ嶋にたつなきわたる
つらゆきかいつみのくにゝ侍りける時にやまとより
こえまうてきてよみてつかはしける
藤原たゝふさ
きみをおもひおきつのはまになくたつのたつねくれはそありとたにきく
返し
つらゆき
おきつ浪たかしのはまの浜松の名にこそ君をまちわたりつれ
なにはにまかれりける時よめる
なにはかたおふるたまもをかりそめのあまとそ我はなりぬへらなる
あひしれりける人のすみよしにまうてけるに
よみてつかはしける
みふのたゝみね

住吉とあまはつくともなかゐすな人忘草おふといふなり

なにはへまかりける時たみのゝしまにてあめ
にあひてよめる

つらゆき

あめによりたみのゝしまをけふゆけと名にはかくれぬ
ものにそありける

法皇にしかはにおはしましたりける日つる（一本みきたれを）
すにたてりといふことをたいにてよませたまひける

あしたつのたてるかはへをふく風によせてかへらぬ浪かとそみる

中務のみこ（敦慶 後式部卿）の家の池に舟をつくりておろし
はしめてあそひける日法皇御覧しにおはしましたりけり
ましけりゆふさりつかたかへりおはしまさむとしけるをりに
よみてたてまつりける

伊勢

水のうへにうかへる舟の君ならはこゝそとまりといはまし物を

からことゝいふ所にて春のたちける日よめる

真せい法し

宮こまてひゝきかよへるからことは浪のをすけて風そひきける

ぬのひきのたきにてよめる

在原行平朝臣

こきちらすたきの白玉ひろひおきて世のうき時の涙にそかる

布引のたきのもとにて人々あつまりてうたよみける
時によめる

なりひらの朝臣

ぬきみたる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせはきに

よしのゝたきを見てよめる

承均法師

たかためにひきてさらせるぬのなれや世をへて見れととる人もなき

神たい法師

きよたきのせゝのしらいとくりためて山わけ衣をりてきましを

龍門にまうてゝたきのもとにてよめる

伊勢

たちぬはぬきぬきし人もなきものをなに山ひめのぬのさらすらむ

朱雀院のみかとぬのひきのたき御覧せむとて文月のなぬかの日おはしましてありけるときにさふらふ人〳〵に歌よませ給ひけるによめる

たちはなのなかもり

ぬしなくてさらせるぬのをたなはたにわか心とやけふはかさまし

ひえの山なるおとはのたきを見てよめる

たゝみね

おちたきつたきのみなかみとしつもりおいにけらしなくろきすちなし

おなしたきをよめる

みつね

風ふけとところもさらぬ白雲はよをへておつる水にそありける

田むらの御時に女房のさふらひにて御屏風の絵御覧しけるにたきおちたりけるところ

をもしろしこれを題にて哥よめとさふらふ
人におほせられけれはよめる

三条の町　惟喬のみこの母

思せく心の内のたきなれやおつとは見れとをとのきこえね

屏風の絵なる花をよめる

つらゆき

さきそめし時よりのちはうちはへて世は春なれや色のつねなる

屏風の絵によみあはせてかきける

坂上これのり

かりてほす山田のいねのこきたれてなきこそわたれ秋のうけれは

古今和歌集巻第十八

雑哥下

題しらす　　　　読人しらす

世中はなにかつねなるあすか河きのふのふちそけふはせになる

いく世しもあらしわか身をなそもかくあまのかるもに思ひみたるゝ

雁のくる峯のあさきりはれすのみおもひつきせぬ世中のうさ

をのゝたかむらの朝臣

しかりとてそむかれなくにことしあれはまつなけかれぬあなう世中

かひのかみに侍ける時京へまかりける人に
つかはしける　　　　をのゝさたき

宮こ人いかにとゝはゝ山たかみはれぬくもゐにわふとこたへよ

文屋のやすひてみかはのそうになりて
あかたみにはえいてたゝしやといひやれりける返事に
よめる　　　　小野小町

わひぬれは身をうき草のねをたえてさそふ水あらはいなむとそ思ふ

題しらす

あはれてふことこそうたて世中を思ひはなれぬほたしなりけれ

よみ人しらす

あはれてふことのはことにおく露は昔をこふる涙なりけり

世中のうきもつらきもつけなくにまつしる物はなみたなりけり

世中は夢かうつゝかうつゝとも夢ともしらすありてなけれは

世中にいつらわか身の有てなしあはれとやいはむあなうとやいはむ

山里はものゝわひしき事こそあれ世のうきよりはすみよかりけり

これたかのみこ

白雲のたえすたなひく峯にたにすめはすみぬる世にこそ有けれ

ふるのいまみち

しりにけむきゝてもいとへ世中は浪のさはきに風そしくめる

そせい

いつこにか世をはいとはむ心こそ野にも山にもまとふへらなれ

よみ人しらす

世中はむかしよりやはうかりけむわか身ひとつのためになれるか

よの中をいとふ山への草木とやあなうの花の色にいてにけむ

みよしの山のあなたにやともかな世のうき時のかくれかにせむ

世にふれはうさこそまされみよしのゝいはのかけみちふみならしてむ

いかならむいはほの中にすまはかは世のうき事のきこえこさらむ

あしひきの山のまにまにかくれなむうき世中はあるかひもなし

世中のうけくにあきぬ奥山のこのはにふれる雪やけなまし

おなしもしなきうた

もののへのよしな

よのうきめみえぬ山地へいらむにはおもふ人こそほたしなりけれ

山の法師のもとへつかはしける

凡河内みつね

世をすてゝ山に入ひと山にても猶うき時はいつちゆくらむ

物思ける時いときなき子をみてよめる

今更になにおひいつらむ竹のこのうきふししけきよとはしらすや

躬恒

題しらす　　　讀人しらす

世にふれはことのはしけきくれ竹のうきふしことに鶯そなく

木にもあらす草にもあらぬ竹のよのはしにわか身はなりぬへらなり

ある人のいはくたかつのみこの哥也　　高津内親王桓武女

わか身からうき世中となつけつゝ人のためさへかなしかるらむ

おきのくにゝなかされて侍ける時によめる

たかむらの朝臣

おもひきやひなのわかれにおとろへてあまのなはたきいさりせむとは

田むらの御時に事にあたりてつのくにのすまと

いふ所にこもり侍けるに宮のうちに侍ける

人につかはしける

在原行平朝臣

わくらはにとふ人あらはすまの浦にもしほたれつゝわふとこたへよ

左近将監とけて侍ける時に女のとふらひに

をこせたりける返事によみてつかはしける

をのゝはるかせ　　寛平十三年卒ね

あまひこのおとつれしとそ今は思我か人かと身をたとる世に

つかさとけて侍ける時よめる
平さたふん

うき世にはかとさせりとも見えなくになとかわか身のいてかてにする

ありはてぬいのちまつまのほとはかりうきことしけくおもはすもかな

みこの宮のたちはきに侍けるを宮つかへつかうまつらすとてとけて侍ける時によめる
みやちのきよき

つくはねのこのもとことにたちそよる春のみ山のかけをこひつゝ

清樹

時なりける人のにはかに時なくなりてなけくを見てみつからのなけきもなくよろこひもなきことを思てよめる
清原ふかやふ

ひかりなき谷には春もよそなれはさきてとくちる物思ひもなし

かつらに侍ける時七条の中宮のとはせ給へりける御返事にたてまつれりける
伊勢

久方のなかにおひたるさとなれはひかりをのみそたのむへらなる

きのとしさたかあはのすけにまかりける時にむまのはなむけせむとてけふといひおくれりける時にこゝかしこにまかりありきて夜ふくるまて見えさりけれはつかはしける

なりひらの朝臣

今そしるくるしき物と人またむさとをはかれすとふへかりけり

これたかのみこのもとにまかりかよひけるを
かしらおろしてをのといふ所に侍けるに正
月にとふらはむとてまかりたりけるにひえの
山のふもとなりけれは雪いとふかゝりけり
しひてかのむろにまかりいたりてをかみけるに
つれつれとしていと物かなしくてかへりまうて
きてよみておくりける

わすれては夢かとそ思ふおもひきや雪ふみわけて君をみむとは

深草のさとにすみ侍て京へまうてくとて
そこなりける人によみておくりける

年をへてすみこしさとをいてていなはいとゝ深草野とやなりなむ

よみ人しらす

野とならはうつらとなきて年はへむかりにたにやは君はこさらむ

よみ人しらす

我をきみなにはのうらにありしかはうきめをみつのあまとなりにき

このうたはある人むかしおとこありけるをうなの
おとことはすなりにけれはなにはなるみつの
てらにまかりてあまになりてよみておとこにつかはせりけるとなむいへる

なし

おほちかうむしろ(むき)にうちわたはえすゝつこをかへつのあさかひ
今はらはうらてのきへもたをはえすやへむすびてかとさせわたへ
とまうちのひさしうまうてこはかゝろもとに
よこてつゝりしらく

みつね

水のおもよおもふさ月のうきくさのうき木のおもやねをたえてこぬ
人をとをくてひさしうあはかくろおかみなうたれ
なれとよる
身をすてゆきやしろそむ男つわほつるやいんかすつかろわ
むねをつのおほのおつこしあまうてきてあるる時に

雪乃ふりかゝるをみてそのゝおもひそこのゆき
のことくるむつまれをもひおもりよしある
きみのおもひ雪とつまはるのきれす春よりのちもあはしとおもへは
みて
君をのみおもひうちのさと山えみつえ雪のきゆる時ある
こしをかけ
人よつゝりしらく
家持大輔
きのつゆき
思やるこしのさと山さとねともひとをゆきまこえねよそなき
よこ
人しれ
いさこよわつのそへへるむすひてやまさとのあれはおもし
頼らす
わつのほえかの山ならぬくもそつしきはせすまふそうと

きせん法し

わかいほは宮このたつみしかそすむ世をうち山と人はいふなり

よみ人しらす

あれにけりあはれいくよのやとなれやすみけん人のをとつれもせぬ

ならへまかりける時にあれたる家に女の琴ひきけるをきゝてよみていれたりける

よしみねのむねさた

わひ人のすむへきやとゝみるなへになけきくはゝることのねそする

はつせにまうつるみちにならの京にやとれりける時よめる

二条　源いたるの朝臣女

ひとふるす里をいとひてこしかともならの宮こもうき名なりけり

題しらす　よみ人しらす

世中はいつれかさしてわかならむゆきとまるをそやとゝはさたむる

相坂の嵐のかせはさむけれとゆくゑしらねはわひつゝそぬる

風のうへにありかさためぬちりの身はゆくゑもしらすなりぬへらなり

家をうりてよめる

伊勢

あすかゝはふちにもあらぬわかやともせにかはりゆく物にそありける

つくしに侍ける時にまかりかよひつゝこうちける人のもとに京にかへりまうてきてつかはしける

きのとものり

ふるさとは見しこともあらすおのゝえのくちし所そこひしかりける

女ともたちと物かたりしてわかれてのちにつかはしける

みちのく　橘としなかゝ女

あかさりし袖のなかにやいりにけむわかたましひのなき心ちする

寛平御時にもろこしのはう官にめされて侍ける時に東宮のさふらひにておのことも酒たうへけるついてによみ侍ける

ふちはらのたゝふさ

なよ竹のよなかきうへにはつしものおきゐて物を思ふころかな

題しらす

よみ人しらす

風ふけはおきつしら浪たつた山夜はにや君かひとりこゆらむ

ある人この哥は昔大和の国なりける人のむすめにある人すみわたりけりこの女おやもなくなりて家もわるくなりゆくあひたにこのおとこ河内のくにゝ人をあひしりてかよひつゝかれやうにのみなりゆきけりさりけれともつらけなるけしきもみえてかうちへいくことにおとこの心のことくしつゝいたしやりけれはあやしと思てもしなきまにこともやあるとうたかひて月のおもしろかりける夜かうちへいくまねにてせんさいのなかに

かくれて見をれは夜ふくるまてことをかき
ならしつゝうちなけきてこのうたをよみてねに
けれはこれをきゝてそれより又ほかへも
まからすなりにけりとなむいひつたへたる

たかみそきゆふつけ鳥か唐衣たつたの山にをりはへてなく

わすられむ時しのへとそはまちとりゆくへもしらぬあとをとゝむる

貞観の御時万葉集はいつはかりつくれると
とはせ給ひけれはよみてたてまつりける

文屋ありすゑ

神な月時雨ふりおけるならのはの名におふ宮のふることそこれ

寛平御時歌たてまつりけるついてにたてまつりける

大江千里

あしたつのひとりおくれてなくこゑは雲のうへまてきこえつかなむ

藤原かちおむ

ひとしれす思ふ心は春のかすみたちいてゝきみかめにも見えなむ

うためしける時にたてまつるとてよみておくに
かきつけてたてまつりける

伊勢

山河のをとにのみきくもゝしきを身をはやなからみるよしもかな

古今和歌集巻第十九

雑躰

短哥

題しらす　　　　讀人しらす

あふことの　まれなる色に　おもひそめ　わか身はつねに
あまくもの　はるるときなく　ふしのねの　もえつつとはに
おもへとも　あふことかたし　なにしかも　人をうらみむ
わたつみの　おきをふかめて　おもひてし　おもひはいまは
いたつらに　なりぬへらなり　ゆく水の　たゆるときなく
かくなわに　おもひみたれて　ふるゆきの　けなはけぬへく
おもへとも　えふの身なれは　なほやまず　おもひはふかし
あしひきの　山したみつの　こかくれて　たきつこころを
たれにかも　あひかたらはむ　いろにいては　人しりぬへみ
すみそめの　ゆふへになれは　ひとりゐて　あはれあはれと
なけきあまり　せむすへなみに　にはにいてて　たちやすらへは
しろたへの　衣のそてに　おくつゆの　けなはけぬへく
おもへとも　なほなけかれぬ　はるかすみ　よそにも人に
あはむとおもへは

ふるうたたてまつりし時のもくろくのそのなかうた

つらゆき

ちはやふる　神のみよゝり　くれ竹乃　世ゝにもたえす
あまひこの　おとはの山乃　はるかすみ　おもひみたれて
さみたれ乃　そらもとゝろに　さよふけて　山ほとゝきす
なくことに　たれもねさめて　からにしき　たつたの山乃
もみちはを　みてのみしのふ　神な月　しくれしくれて
冬のよ乃　庭もはたれに　ふるゆきの　なほきえかへり
年ことに　時につけつゝ　あはれてふ　ことをいひつゝ
きみをのみ　ちよにといはふ　世の人の　おもひするかの
ふしのねの　もゆるおもひも　あかすして　わかるゝなみた
ふち衣　おれるこゝろも　やちくさの　ことのはことに
すへらきの　おほせかしこみ　まきゝの　中につくすと
いせの海乃　うらのしほかひ　ひろひあつめ　とれりとすれと
玉のをの　みしかきこゝろ　思あへす　なほあらたまの
年をへて　大宮にのみ　ひさかたの　ひるよるわかす
つかふとて　かへりみもせぬ　わかやとの　しのふくさおふる
いたまあらみ　ふるはるさめの　もりやしぬらん

ふるうたにくはへてたてまつれるなかうた

壬生忠岑

くれ竹乃 世ゝのふること なかりせは いかほのぬまの
いかにして おもふこゝろを のへまし あはれむかしへ
あはきてふ 人まろこそは うれしけれ なえさなう
ことのはを あめつちそれ きこえあけ 玉のうてなの
あまくたり 今もおほせの くらゐえて ちはよつそとや
ちはのかは 流もれなるを とゝろかむ これもおもへは
けふとのく 雲にはえけむ こゝちして ちくのる花をも
おもはれす ひとつ心を ほとらしき かくえおれとも
なるいる ちつきさまあ あなわつをも されいつ林の

くらゐに あさひさして みつきには このへすかたの
みをしれは おもくして おもほえす こゝのはるの
なりそむる あらしの風を きゝわかき 今はのかせ
ちりぬれは 春はすゑに しるひとの 夜ひかせて
なきそむる 秋は時雨に そそきて 冬はてよう
せめつく からくひき かるかに つもれるを
をはせれは いつのものは あるなかは これなかれ
わかしれの おいのすゑ やそれ かえなくて
年ふりき ことのくるさ かくしつて なかのえの

なりへて　なにはのうらに　たつなみの　なみのしわにや
おほゝれむ　さすかにいのち　おしけれは　こしのくになる
志ら山乃　かしらはしろく　なりぬとも　をとはのたきの
をとにきく　おいすしなすの　くすりもか　きみかやちよを
わかえつゝみむ
きみか世に逢坂山乃いはし水こかくれたりと思ける哉
冬のなかうた　凡河内躬恒
ちはやふる　神な月とや　けさよりは　くもりもあへす
うちしくれ　もみちとともに　ふるさとの　よしのゝ山乃
山あらしも　さむく日ことに　なりゆけは　たまのをとけて
こきちらし　あられみたれて　霜こほり　いやかたまれる
にはのおもに　むらむらみゆる　冬くさの　うへにふりしく
志らゆきの　つもりつもりて　あらたまの　としをあまたも
すくしつる哉
七条のきさきうせたまひにけるのちによみける
延喜七年六月八日崩卅六
伊勢
おきつなみ　あれのみまさる　宮のうちは　としへてすみし
いせのあまも　舟なかしたる　心ちして　よらむかたなく
かなしきに　なみたのいろの　くれなゐは　われらかなかの

時雨にて　秋のもみちと　ひと〳〵は　をのかちり〳〵
わかれなは　たのむかけなく　なりはてゝ　とまるものとは
花すゝき　きみなき庭に　むれたちて　そらをまねかは
はつかりの　なきわたりつゝ　よそにこそみめ

旋頭哥

題しらす　　よみ人しらす
うちわたす　をちかた人に　もの申す　われ
そのそこに　しろくさけるは　なにの花そも
返し
春されは　野辺にまつさく　みれとあかぬ花　まひなしに
たゝなのるへき　花のなれや
題しらす
はつせ川　ふるかはのへに　ふたもとある杉　としをへて
またもあひみむ　ふたもとあるすき
つらゆき
きみかさす　みかさの山の　もみちはの色　神な月
しくれのあめの　そめるなりけり

誹諧哥

題しらす　読人しらす

むめの花見にこそきつれうくひすのひとくひとくといとひしもをる

素性法し

山吹の花色衣ぬしやたれとへとこたへすくちなしにして

藤原としゆきの朝臣

いくはくの田をつくれはかほとゝきすしてのたをさをあさなあさなよふ

七月六日たなはたの心をよみける

藤原かねすけの朝臣

いつしかとまたく心をはきにあけてあまのかはらをけふやわたらむ

題しらす　凡河内みつね

むつことをまたつきなくにあけぬめりいつらは秋のなかしてふよは

僧正へんせう

秋ののになまめきたてるをみなへしあなかしかまし花もひと時

よみ人しらす

あきくれはのへにたはるゝ女郎花いつれの人かつまてみるへき

秋霧のはれてくもれは女郎花花のすかたそみえかくれする

花とみておらむとすれは女郎花うたゝあるさまの名にこそありけれ

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

在原むねやな

秋風にほころひぬらし藤はかまつゝりさせてふきり〳〵すなく

あすはるたゝむとしける日となりの家のかたより風の雪をふきこしけるを見てそのとなりへよみてつかはしける

清原ふかやふ

冬なから春のとなりのちかけれはなかゝきよりそ花はちりける

題しらす

よみ人しらす

礒乃かみふりにし恋乃かみさひてたゝるに我はそねかねつる

枕よりあとより恋のせめくれはせむ方なみそとこなかにをる

こひしきか方もかたこそありときけたてれをれともなきこゝちかな

ありぬやとこゝろみかてらあひ見ねはたはふれにくきまてそこひしき

みゝなしの山のくちなしえてしかなおもひの色のしたそめにせむ

あしひきの山田のそほつおのれさへ我をほしといふうれはしきこと

きのめのと

ふしのねのならぬおもひにもえはもえ神たにけたぬむなしけふりを

きのありとも

あひ見まくほしはかすなくありなから人に月なみまとひこそすれ

をのゝこまち

人にあはむ月のなきには思ひおきてむねはしり火に心やけをり

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

春霞たなひくのへのわかなにもなりみてしかな人もつむやと 藤原おきかせ

題しらす よみ人しらす

おもへともなほうとまれぬ春霞かゝらぬ山のあらしとおもへは

平貞文

春の野のしけき草葉のつまこひにとひたつきしのほろゝとそなく

きのよしひと

秋のゝにつまなきしかのとしをへてなそわかこひのかひよとそなく

みつね

せみのはのひとへにうすき夏衣なれはよりなむものにやはあらぬ

たゝみね

かくれぬのしたよりおふるねぬなはのねぬなはたゝしくるないとひそ

よみ人しらに

ことならはおもはすとやはいひはてぬなそ世中のたまたすきなる

おもふてふ人の心のくまことに立かくれつゝみるよしもかな

思へともおもはすとのみいふなれはいなやおもはしおもふかひなし

我をのみおもふといはゝあるへきをいてや心はおほぬさにして

われを思人を思はぬむくいにやわかおもふ人の我をおもはぬ

一本 ふかやふ

おもひけむ人をそともにおもはましまさしやむくいなかりけりやは

一本 よみ人しらす

いてゝゆかむ人をとゝめむよしなきにとなりの方にはなもひぬかな

紅にそめし心もたのまれす〳〵をあくにはうつるてふなり

いとまなくわれそてにそるかやのもみちはそのまなるすてつつ

鶯のこゑのやさしのあはすや我うれ〳〵のつれなかる覧ん

ゆめのしらまに夜をひとりねさへのさやうてもかな　わつひとわかる

平中興

あふことの今はつるまわぬれ衣ながくらていつ月なわかわ

左の袂まつうちきこ

まろしのよしの山よこすかとたくむと思我すつなくよ

なつき

雲いねぬあさ霞の山のあさましや〳〵の心を見てこそやさめ

伊勢

なかすくちなゆしのたしもてつなきは今はわか身をもなかくうらむ

よそに〳〵しにたきせ

涌泉なれとなかれよけくるやのなかれてあれとあけくとなし

なかすそのなのうつとのむかしあはてよふは我ひとわかえ

いそこなたわたる胡とこまよふて〳〵のかたくれし

くち

源つくるか女

よそなからわか身にいとのよるといへはさてそるはすくは也

鶴うつす

さねき

なきことをはのときくそむやまこころもそいるてきのまわと

安倍清行朝臣女

なるてめ

あけきこの山とこそくるわれなりつゝ思のとうちてくれら

よみ人しらす

大輔　源すく女

なけきをこゝろのみつみてあさなきの山のあたくるわつねや

へふる下をともよとにありてあふこゝろさにかはしあかれ

よねのゆよそへゆるみの月のわれて物思こゝろもあらず

ろへまてとはれたくわかくすれたあるよひしはあさきらまた

世中乃うきこゝひとまとをうそく涛き谷こそあさくるわるめ

在原ゆとある

よみのえへいうくるすと思てしそらのへようしみるらし

よみ人しらに

なよそのえものとうつしおもいぬむ年のはちむことうちやさしき

たきの世

かえすそほんそうまとそあへうしつぬよそゆくあるとしらく

千はと

白雪乃ともはゆかきそふるねれとんえきこえぬまのまあはれなる

よみ人しらに

梅花はきそのくちのかなれたやすきぬとのはへのちかひ

法皇にしのえよおいしあしわたかはやま

のりひよきそふとひとをさそてまもさそうなる

わびしらにましらななきそあしひきの山のかひあるけふにやはあらぬ

みつね

題しらず

読人しらず

世をいとひこのもとごとにたちよりてうつぶしぞめのあさのきぬなる

古今和歌集巻第二十

大歌所御歌

おほなほびのうた

あたらしき年のはじめにかくしこそちとせをかねてたのしきをつめ

日本紀にはつかへまつらめよろづよまでに

ふるきやまとまひのうた

しもとゆふかづらき山にふる雪のまなくときなくおもほゆるかな

あふみぶり

あふみよりあさたちくればうねののにたづぞなくなるあけぬこのよは

みづくきぶり

水くきのをかのやかたにいもとあれとねてのあさけの志ものふりはも

志はつ山ふり

しはつ山うちいてゝみれはかさゆひの嶋こきかくるたなゝしをふね

神あそひのうた

とりものゝうた

神かきのみむろの山のさかきはゝ神のみまへに志けりあひにけり

志もやたひをけとかれせぬさかきはのたちさかゆへき神のきねかも

まきもくのあなしの山の山人と人もみるかに山かつらせよ

み山にはあられふるらしと山なるまさきのかつらいろつきにけり

みちのくのあたちのまゆみわかひかはすゑさへよりこ志のひ志のひに

わかゝとのいたゐの志水さとゝをみ人しくまねはみくさおひにけり

ひるめのうた

さゝのくまひのくま河にこまとめて志はし水かへかけをたにみむ

かへしものゝうた

あをやきをかたいとによりてうくひすのぬふてふかさはむめのはなかさ

まかねふくきひの中山おひにせるほそたに河のおとのさやけさ

この哥は承和の御へのきひのくにの哥

美作やくめのさら山さらさらにわかなはたてしよろつよまてに

これは水のおの御へのみまさかのくにの哥

みのゝくにせきのふち川たえすして君につかへむよろつよまてに

これは元慶の御へのみのゝうた

きみかよはかきりもあらしなかはまのまさこのかすはよみつくすとも

これは仁和の御へのいせのくにのうた

あふみのやかゝみの山をたてたれはかねてそ見ゆる君かちとせは　大伴くろぬし

これは今上の御へのあふみのうた

東歌

みちのくうた

あふくまにきりたちくもりあけぬとも君をはやらしまてはすへなし

みちのくはいつくはあれとしほかまの浦こく舟のつなてかなしも

わかせこをみやこにやりてしほかまのまかきのしまのまつそこひしき

をくろさきみつのこしまの人ならはみやこのつとにいさといはましを

みさふらひみかさと申せ宮木野のこのしたつゆはあめにまされり

もかみ河のほれはくたるいなふねのいなにはあらすこの月はかり

きみをゝきてあたし心をわかもたはすゑの松山浪もこえなむ

さかみうた

こよろきのいそたちならしいそなつむめさしぬらすなおきにをれなみ

ひたちうた

つくはねのこのもかのもに影はあれと君かみかけにますかけはなし

つくはねの峯のもみちはおちつもりしるもしらぬもなへてかなしも

かひうた

かひかねをさやにも見しかけゝれなくよこほりふせるさやの中山

甲斐かねをねこし山こし吹風を人にもかもやことつてやらむ

伊勢うた

をふのうらにかたえさしおほひなるなしのなりもならすもねてかたらはむ

冬の賀茂のまつりのうた

藤原としゆきの朝臣

ちはやふるかものやしろのひめこ松よろつ世ふともいろはかはらし

家々稱證本之本乍書入以墨滅哥　今別書之

巻第十　物名部

ひくらし　つらゆき

うち/そま人は宮木ひくらしあしひきの山の山ひこよひとよむなり

在郭公下空蝉上

勝臣

かけりてもなにをかたまのきてもみむからはほのほとなりにしものを

をかたまの木　友則下

くれのおも　つらゆき

こし時とこひつゝをれは夕くれのおもかけにのみみえわたるかな

一　忍草　利貞下

おきの井　みやこしま

をのゝこまち

おきのゐて身をやくよりもかなしきは宮こしまへのわかれなりけり

からこと　清行下

そめとの　あはた

あやもち

うきめをはよそめとのみそのかれゆく雲のあはたつ山のふもとに

この哥水のをのみかとのそめとのよりあはたへうつりたまうける時によめる

巻第十一　奥山のすかのねしのきふる雪下

まつ人をこふるには大井河なかるゝ水になみのたゝねは
わきてしこそ相坂山乃志のすきたまえてすまこひわたるらむ

巻第十三

こひしくは志たにすきなむ人もしはきの下
ねみのとこの山すかすかわ河ゝさとこゝろよわるなもらする
この年ある人あめのみことのあふをのうねかさき
へつと

ぬし

うねめのそてふれ

山なのなはいのしきのなをまさみ人のまへくわこひめやも

巻第十四

思てふことのはのみや秋をへて下
うらかれぬひかのひとわのそてみをとをらひてまふて
わせこのくへきよもにさくらのくまのつらこひかれそしるしも
謀叢又こひとゐさつるつらいむしとすむ下
はらゆき
みちのくのつみのまゆのむすれのきてしよれよてふ
こひわすれくさ

古今和哥集序

紀淑望

夫和歌者託其根於心地發其華於詞林者
也人之在世不能無為思慮易遷哀樂相變
感生於志詠形於言是以逸者其聲樂怨者
其吟悲可以述懷可以發憤動天地感鬼神
化人倫和夫婦莫宜於和哥　和哥有六義
一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌

若夫春鶯之囀花中秋蟬之吟樹上雖無
曲折各發哥謠物皆有之自然之理也然而
神世七代時質人淳情欲無分和哥未作
逮于素戔烏尊到出雲國始有三十一字
之詠今反哥之作也其後雖天神之孫海童
之女莫不以和哥通情者爰及人代此風大
興長哥短哥旋頭混本之類雜躰非一源

流漸繁譬猶拂雲之樹生自寸苗之煙浮
天之波起於一滴之露至如難波津之什
獻
天皇富緒川之篇報　太子或事關神異
或興入幽玄但見上古歌多存古質之
語未爲耳目之翫徒爲教戒之端古
天子毎良辰美景詔侍臣預宴筵者獻
和歌君臣之情由斯可見賢愚之性於是
相分所以隨民之欲擇士之才也自大津（天武天皇第三皇子）
皇子之初作詩賦詞人才子慕風繼塵
移彼漢家之字化我日域之俗民業一改
和歌漸衰然猶有先師柿本大夫者
高振神妙之思獨歩古今之間有山邊
赤人者並和歌仙也其餘業和歌者

綿々不絶及彼時變澆漓人貴奢淫
浮詞雲興艶流泉涌其實皆落其華孤
榮至有好色之家以此為花鳥之使乞
食之客以此為活計之媒故半為婦人
之右難進大夫之前近代存古風者纔二三
人然長短不同論以可辨華山僧正尤得
哥體然其詞華而少實如圖畫好女

徒動人情在原中将之哥其情有餘其詞
不足如萎花雖少彩色而有薫香文琳
巧詠物然其體近俗如賈人之着鮮衣
宇治山僧喜撰其詞華麗而首尾停滞
如望秋月遇暁雲小野小町之哥古衣通
姫之流也然艶而無氣力如病婦之着
花粉大友黒主之歌古猿丸大夫之次也

頗有逸興而體甚鄙如田夫之息花前也
此外氏姓流聞者不可勝數其大底皆以
艶為基不知歌之趣者也俗人争事栄
利不用詠和歌悲哉々々雖貴兼相将
富餘金銭而骨未腐於土中名先滅世上
適為後世被知者唯和歌之人而已何者
語近人耳義慣神明也昔平城天子

詔侍臣令撰萬葉集自爾以来時歴十
代數過百年其後和歌棄不被採雖風
流如野宰相軽情如在納言而皆以他才聞
不以斯道顕
陛下御宇于今九載仁流秋津洲之外恵
茂筑波山之陰淵変為瀬之聲寂々
閉口砂長為巌之頌洋々満耳思継

既絶之風欲興久廢之道爰詔大内記紀
友則御書所預紀貫之前甲斐少目凡河
内躬恒右衛門府生壬生忠岑等各獻家集
并古来舊哥曰續万葉集於是重有詔
部類所奉之哥勒為二十巻名曰古今和哥
集臣等詞少春花之艶名竊秋夜之長
况哉進恐時俗之嘲退慙才藝之拙
適遇和哥之中興以楽吾道之再昌嗟乎
人丸既没和哥不在斯哉于時延喜五年
歳次乙丑四月十五日臣貫之等謹序

此集家々所稱雖説々多且任師説又加了
見為備後學之證本不顧老眼之不堪
自書之
近代僻案之好士以書生之失錯稱有識
之秘事可謂道之魔性不可用之但
用捨只可隨其身之所好不可存自他差
別志同者可隨之
貞應二年七月廿二日 癸未 戸部尚書藤判
同廿八日令讀合訖書入落字了
傳于嫡孫可為將來之證本

一家ニ不遁秘漢文字仕并
行分ハ連々書写様合并但於
流派之序列以枝者先人御自筆被
行分ハ不被写三本々首雖随
其自奉々而遠一字ニ行分以下
落字不皆以本末之正細之
枝見之条不可違自如此厳重
深意有之相違家者也

文保二年四月十二日　羽林中将持明

此雙紙雖為草案切句之本
前進大納言法印御房也 且元年 正和五
故黄門 于時前宰相中将 奉授付属之耳
雙紙者 小自筆 可本進其同之
别紙進畢書之 非無依違之
之別并 勅撰沙汰事写不申
行未林絵 早世之間 且思彼
納言之旨 且奉優教之志所
進之也
正中元年十一月十六日 武蔵守藤

正中元年十二月十八日以家説

授大納言法印澄潤了

前大納言藤

此本不慮之感得悦躍
余猶識書為未學者之謂
年
于時寛政第二初商日
閑路盆桐

重校今年
文明十年仲春日
従一位

此本為定卿自筆也子細見
奥書畢顕可謂證本者也
初五枚者為道朝臣（為定卿實父）筆云々
永正七年林鐘初吉記之
桃坊紫竹拙叟